

空人と雷人

シャインベルク

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

受け取った悪魔の実は自然系“ソラソラ”の実。

その名の如く“空”すなわち空間を操る能力。

余りに便利過ぎる能力をもらった男は、何故か空の上に飛ばされた。

どうするべきか悩んでいると、今にも墜落しそうな船が目の前を通る。

ボロボロの船の上には、ボロボロの男が。

……とりあえず、船と船員確保だな！

そうして、男は自由にこの世界を生きる事にする。

目次

プロローグ 落ちた神	1
プロローグ2 飛んだ人	5
プロローグ3 始まりの日	16
第1話 初交渉と初戦闘	23
第2話 1人目と目的地	33
第3話 猛特訓	42
第4話 水の都“ウォーターセブン”	51
第5話 アイスバーグさん	65
第6話 運命の日	78
第7話 司法の島“エニエス・ロビー”	101
第8話 強行突破	110
第9話 バスターコール	130
第10話 海軍本部“大将”青キジ	142
第11話 一段落	155
第12話 彼の理由、彼女の理由	166
第13話 6億の男	185
第14話 月下の出航	197

プロローグ 落ちた神

その男は、「神」と呼ばれていた。

「私は……還るんだ……」「神」の……在るべき場所に……」

まさしく「神」に相応しい強大な力をもっていた。

それは誰もが戦うことを諦めた、自然現象そのものを統べる能力だった。

「私の視界を妨げるものなど……この空にあつてはならない……」

その力に惹きつけられ、多くの部下をもっていた。

もつとも、その男自身は自分の目的に使える駒程度の認識だったが。

「ヤハハハ……もはや邪魔は入らん……」

そして、元“神”を下し、その座に君臨し土地を奪った。

そこに住む人々は恐怖で縛りつけ、使える者は奴隷として使った、自身の目的の為だけに、奴隷の如く人々を使い潰した。

そして、“神”に相応しき巨大な船を作り上げた。

「誰にも渡さん……あれは私にこそふさわしいものだ……」

順調だった。何の問題も起こらなかった。全て思い通りに進んだ筈だった。もう少して、望み焦がれたものが、手に入る筈だった。

「忌々しい青海人が……」

だが、たった一人の男によって、全ての計算が狂った。

その男には、“神”の力が通じなかった。島一つ落とす力すら打ち砕いた。視界から幾度となく蹴落としても、何度も何度も立ち上がってきた。

そして一時的とはいえ、私をこの空から叩き落した。この偉大なる“神”をだ。

未だに、何故あの男に敗れたのか。聞いたこともない物質“ゴム”とはなんなのか。

どうして恐れずに私に向かってきたのか、疑問は尽きなかった。

少しだけあの男に興味があった。そしてあの男が来たと思われる場所にもだった。

“青海”と私達が呼ぶ、大地を生み出す世界はどんな場所なのか。

「まあいい……今は……」

だが、今はそんなことに構ってはいられなかった。

その男との戦闘により、損傷が激しいこの船は飛ぶことのみで限界だった。

全てはあの場所に到着してから考えればいい。まずはそこからだ。

「さあいこう」マクシム」

本来、この時点で邪魔は入らないはずだった。

それもそのはず、ここは上空数万メートルの超高空。

何者も立ち入ることも出来ないまさしく神の領域なのだから。

「夜に目映く浮かぶ、あの神の世界……夢の様な果てしない大地……」

だが

「フェアリーヴアース限らない大地へ!!!!」

その男は

「あゝ、ちよつと待つてくれない？」

神の領域に、突如として現れた。

こうして2人の男は巡りあつた。空を統べる男と、雷を統べる男。その姿を、“神”が目指した大地だけが、静かに見つめていた……

プロローグ2 飛んだ人

「……なんでさ？」

気が付くとそこは雲の上だった。

「……いやいやいや、意味が分からん!? なにがどうなってんのよ!？」

パニック状態になりながら、辺りを窺っても見渡す限りの空と雲しか視界に入らない。

そもそもなんで雲の上に立っていられるのかもわからない。

誰かに話を聞こうにも、こんな所に人がいるとは思えない。

「勘弁してくれよ……俺がなにしたってのさ……」

どうしようもなくなってしまう途方に暮れて俯くと、足元に何かが落ちているよう

だ。

見た目は普通の宝箱のようだが、如何にもな感じが怪しすぎる。

というか宝箱が普通に落ちているだけでも充分に怪しい。

手に抱えられる程度の大きさで、大して重くもない。軽々持ち上げることが出来た。軽く振ってみるとどうやらなにかが入っているようだ。

「やっぱり、開けるしかないよな……」

この状況を打破できる何かが入っていると信じ、藁にも縋る思いでその宝箱を開けることにする。

鍵などはかかっていないようで、特に問題なくその蓋を開けることができた。

そこには一枚の手紙と、見た目がアレなどともマズそうな果物らしき物が入っていた。

漫画やアニメでよく見る機会があったそれは間違いなく、

「ってコレどうみても悪魔の実じゃねーか！」

慌てて入っていた手紙に目を通す。そこには信じがたいことが書かれていた。

『はじめまして、お元気ですか？唐突ですが貴方は一度死にました。

ですが私達の事情により、貴方にはその“ONE PIECE”の世界で生きてもらいます。

え？その事情ですか？そんなものただの娯楽ですよ。

たまたま都合のいいタイミングで来た魂があつてラツキーでした。

むしろそのまま消える筈だった貴方を、記憶も肉体もそのままにして転生させたのですから、

私に感謝するべきですよ？泣いて喜んでいいのですよ？

ああ、一応最低限肉体は強化しておきました。

流石にそのままだとアツサリ死んでしまいそうでしたので。

世界に入り込んだ異物として、せいぜい楽しませてくださいいね。神様より』

……オーケー、ちょっと落ち着こう。この上から目線の書き方は、
すんごい腹が立つが冷静になるべきだ。冷静に……………

「つてアホかあ!!冷静になんざなれるかあ!!」

思わず雲に手紙を叩き付ける。ポフン 情けない音が鳴りもつと腹が立つ。

「つーかなんで俺死んでんの!?!しかも転生つて急すぎるんだよ!?

いきなり飛ばす前にせめて説明ぐらい直接しろやあ!!」

ハアハア……ある程度叫ぶと少しだけ頭が冷えたのか、思考回路が戻ってきた。

「落ち着けよ俺……………とりあえず、色々整理しよう……………」

ひとまず一番最近の記憶から思い出そうとする。ええつと確か……………

仕事帰りにコンビニに寄ったことは覚えてる。面倒だから晩飯をコンビニ弁当で
済ませようって思つて……………そうだ、ついでに立ち読みしようと思つていつも読んでる

ジャンプに手を伸ばした所で、急に辺りが真っ白に……つて、

「あゝ、原因はそれっぽいな……」

多分、あれはトラックか何かのヘッドライトだったのだろう。

居眠り運転か飲酒運転か知らんが、コンビニに突っ込んできて、

たまたま雑誌コーナーが道路沿いだったから巻き込まれたようだ。

ついてねえ……いや、死んでもこうして転生したんだから運はいいのか？

まあ過ぎたことを悔やんでももう手遅れだしなあ……

これからどうするかを考えた方が現実的か。

「とはいえ、これからどうしたものか……」

自分の置かれた状況は把握できた。だが解決策はさっぱりである。

絶望的な状況には変わりない。しかもそろそろ日が暮れるようで、

太陽が沈み始めている。このまま夜を迎えるのは避けたい。

「あと出来ることと言えば……」

ここまで考えないようにはしていた、あるモノに目を移す。

ここがワンピースの世界ならば、それは絶大な価値を持つモノ。

「悪魔の実……でも、これ売れば確か一億なんだよなあ……」

食べば人を越えた力が身につくが、その代償として海に嫌われカナヅチになる。

ハイリスクハイリターン、まさに人生を賭けたギャンブル。

売れば大金が入ることも考えれば、出来れば取っておきたいんだが。

「とはいえ、このままじゃただ餓死するだけだし、覚悟決めるか!!」

そもそも、雲の上と言うことは少なくとも高度は空島“スカイピア”級。すなわち上空一万メートルということになる。

そんな高さから落ちたら、いくら水面とはいえ確実に死ぬ。

どこぞのコックや諜報機関みたいに空を歩ける技や、鳥のように空も飛べない限り

は。

—それこそ空を自由自在に動くことができれば—

「うっし!!食べるぞ!!」

覚悟を決めて悪魔の実にかぶりつき飲み込む。だが一つ忘れていた。それは、

「まっつっつずううううう!!!!!!!!!!」

悪魔の実が、とんでもなくマズい事を。

あまりのマズさに思わず吐き出しそうになるが、口を押さえてなんとかこらえる。正直他の能力者の皆さんを尊敬してしまうほど、衝撃的な味だった。

「うおえええ．．．キツツイぞこれ」

なんとか吐き出さずに済んだが、これを全部食うのは無理だ。

よっぽどの緊急事態でもない限りは、一口で充分だろう。

だが、今はその緊急事態である。もしもこの悪魔の実がハズレの場合、
これの残りで飢えをしのぐ羽目になるのだ。

「頼むぜ神様、マジで。」

今の所は体に変化はない。悪魔の実のルールに従えば、同時期に同じ能力は
発現しないらしいので、どんな能力かは見当もつかない。

「さて、どうやって確認すべきか。あれ？」

どうやって能力を調べるべきか悩んでいると、足元が輝きはじめた。

これか？と思ったのだがどうやら違うようで、先ほど投げ捨てた手紙が光っていた。

嫌な予感がしつつも確認することにする。そうすると手紙の裏面に文字が浮かんで
きた。

『P. S.』

この文章は貴方が悪魔の実を食べると読めるようになります。

同封した悪魔の実はサービスで食べる時貴方の想像した力が身につく特別製です』

「そういうことは先に言えや!!」

ブチ切れて手紙を真つ二つに裂いてしまった。そうするとまた手紙が輝き、新たな文字が浮かび上がった。

『P. P. S.』

なぜ先に言わないかって？変な能力が身についた方が面白いでしょう？』

俺は迷わず手紙をぶん投げた。ちくしょう、見てんのかよ。

もし見て無かったとしたら、見てないでツツコミ予測されたほうに腹が立つ。

「つと今はそれどころじゃねえ。想像した能力だど？」

思い出せ、俺は何を考えてこれを食べた？

……駄目だ、あまりのマズさに記憶がぶつとんでる。思い出せ!!

「……………もしかして……………空か？」

あの時、俺は確かに空を自由自在に動けたらここから安全に助かると思った。そう思い鳥人間になったイメージで羽根を生やそうとするが何も起こらない。どうやら動物系ではないようだが、あの時空を想像したのは間違いはない。

「おいおい。まさかとは思うが、”自由自在”の方ってか？」

ものは試しに、目の前に壁をイメージする。すると見た目にはわからないが、触れて見ると確かに壁のようなものが出来ていた。

続いてその壁を横に倒して固定するイメージをする。その上に乗ってみると、なんの問題もなくそこに立つことができた。

「ハハ……これ強すぎじゃね？」

自然系^{ロギア}”ソラソラの実。”

それが俺の能力のようだ。

プロローグ3 始まりの日

「さて、能力が理解できたのはいいとしてこれからどうするか」

空中に浮かびながらこれからのことを考える。

一度能力を理解すると様々なことが出来るようになった。

空中歩行に浮遊、空間創造に瞬間移動と応用力も高そうだ。

手紙に書かれていた肉体の強化とやらはどんなものかまだわからん。

この辺りは後々確かめていくしかないか。

ただ、自然系と思えば自分自身を“空”そのものにすることは出来なかった。

正確には体の一部分なら可能だが、全身は不可能だった。

おそらく不用意に使えば、世界の空と一体化してしまう。

最悪の場合、元に戻れなくなりそうだったのである。

あくまで空を自分の頭で認識して、空間を操作するイメージのほうがよさそうだ。

一応全身の練習もしておきたいが今はそれよりも

「何するにしても、まずは情報かな」

ここはどこで、今はいつなのか。原作的にはどのあたりなのか。介入するにしても放置するにしても、知りたいことは多い。

「せっかくの機会だし、世界を見て回るのもいいかな」

腹立つ神に強制的に飛ばされたんだし、好き勝手に生きてやる。あるお方のセリフを借りるなら、誰よりも自由につてやつだ。

海賊になるのもいいし、賞金稼ぎになって世界を回るのもいい。

ああ、海軍はナシ。規律だなんだと束縛されるのなんざごめんだし、世界貴族のようなカスに従うなんて反吐がでる。

「とりあえず、下に降りてみるかな」

どうやって降りるか、空間を階段状にしてもいいし、一気に飛んで

トランポリンみたいに跳ねながら降りるのも面白そうだ。

「うっし、そんじゃ行ってみますかね」

気合を入れて、超高度からのダイブを試みる。

不意に上を見上げるとすでに日は暮れ、辺りは暗くなり始めていた。

その暗き空にたったひとつ、美しく輝く月。

その月に向かって飛ぶ一隻の飛行船。今にも墜落しそうなほどボロボロだが。

ん？

「いやいやいや、ちょっと待て!?!」

なんで大海賊時代に飛行船があるんだよ!?!おかしいだろ!?!

実はワンピースの世界ではなく、よく似た世界に迷い込んだのかと思った。

飛行船がホイホイ飛んでいる空賊ばかりの世界なのかと。だが、一つだけ可能性があることを思い出した。

「あく、もしかしてあれって“マクシム”か？」

空島の“神”が作り出した、雷を動力とする方舟。

この時代において制空権という、絶大なアドバンテージを誇る物。あれがあれば……

「欲しいな、あれ」

自由に生きることを目標にしている俺にとって、あれほど魅力的な物はない。

どちらにしてもこの時代、船は必ず必要になってくる。

いくら俺の能力が便利とはいえ、拠点は欲しいからな。

「問題があるとすれば、戦闘になった場合今の俺があいつに勝てるかだ」

原作通りならあの船の損傷具合からみて、ちょうど空島編が終わった所のはず。

つまり、一番ダメージを受けている状態だということ。
だがそれを差し引いても、あそこに居る奴は間違いなく強い。

「ゴッド神・エネルギー……」

空島スカイピアを支配していた男。島全域を覆う見聞色の覇気“マントラ心綱”を持ち、
そしてなにより、自然系最強種“ゴロゴロの実の能力者”
……よくあんなのに覇気もなしに勝てたよ、ホント。

「最悪、亜空間創って隔離するしかないか……」

そうしてしまうと船の飛行能力が失われてしまうので、出来れば避けたい。
だが、仮に飛べなくなっても海を進むのに支障はない筈。

どうか説得して味方に引き入れられれば、あれほど心強い奴もいない。
一説によれば懸賞金5億クラスらしいからな。メリットも大きい。
なによりアイツと一緒に世界をひっかき回すのは面白そうだ。

「予定変更。地上に行く前に、船と船員を確保だ」

青海に降りる前に仲間に出来れば、強力な男をスカウトしに行くことにする。そこまで遠いわけではないので、瞬間移動で一気に甲板へ移動する。

「さあいこう」マクシム」

目の前でハイになってる元神様は、俺に気づいていないようだ。まあこんなところにいきなり自分以外が現れるハズないからな。

「フェアリーヴァース限りない大地へ!!!!」

いや、月に行く前に少し付き合ってもらおうぞ。

「あゝ、ちよつと待ってくんない？」

さあ、せつかく手に入れた二度目の人生だ。楽しませてもらうぜ。

第1話 初交渉と初戦闘

「……………なんだと？」

明らかに疑わしい目をして、こちらを見つけるエネルギー。

おーおー、初対面の相手にガンつけてきやがって。

「貴様何者……………いや、一体どこから現れた？」

そう言いながら、杖を突き立ち上がる。それだけで精一杯のようだ。

やっぱり戦闘のダメージは抜けていない。これなら戦つてもいけそうだな。

「まあいい……………」

右腕から雷が走る。……………ってちよつと待てや!! いきなりかよ!!

「^{エル・トール}神の裁き!!」

ズドオン!!!!!!

凄まじい光が目の前を埋め尽くし、続けて爆音が鳴り響いた。

く エネル side く

くそ……ただでさえ消耗しているというのに余計な力を使った……

しかし今の男、何者だ？初めて見る顔だった。

スカイピアはおろか、青海人の中にもいなかった筈……まあ、今となつてはいつでもいいがな……

「私は行かなくてはならないのだ……あの大地に……」

「月に行つてどうするんだ？」

「決まっているだろう……あそこは私が望んだ……!!」

そこには、傷一つない男が立っていた。

何故生きている!!まさかこの男も“ゴム”とやらなのか!!

私が驚いている所に、さらに追い打ちをかけてきた。

「今あそこにいつてもなんにもならんぜ?それこそ一人であんな遠くに逃げて、お前が得る物なんて何一つな……」

コイツは何を言っている……まるであそこがなんなのか知っているような……だが、それよりも……神たる我に向かって逃げるだど……

「そうだろうか？まだまだこの世界には色んなものがある。

「お前が知らないだけで、あの大地より望むものがあるかもしれないのに、それらに目を背け、負けたことから逃げているようにしか見えないね」

「青海には、お前の知らない物も、お前が気に入る物も、お前より強い奴も、いくらでも」未知〃があるんだぜ。そんな世界から逃げるのは勿体無くないか？」

青海……行つたことのない青い海……確かに興味はある。

だが、限らない大地よりも……私が望むものがあるのか？

いや、それよりも……聞かねばならぬ事がある……

「何故そんなことを……私に話すのだ……」

この男の目的はなんだ……この掴めない感覚はなんなのだ……

「はつきり言おう。俺の仲間にならないか？俺はこの船が欲しいのさ。」

俺はこの世界で自由に生きたいんでな。飛行船なんて最高じゃないか」

「ヤハハハ……まさか神たる我に仲間になれなど……」

なんとという不遜。なんとという傲慢。しかも欲しいのは舟のほうだと。

あまりの上から目線の物言いに、笑いが止まらない。

だが、このような者が下の世界には居るといふのか……確かに興味が湧いてきた。

「どうだ？俺と一緒にこの世界を回ってみないか？今なら好待遇で迎えるぞ？」

「確かに……興味が湧いてきたな……だが……」

不思議な感覚だ。こんなに気持ちが高ぶったのは、生まれて始めてかも知れん。

今、先の戦いで疲労も感じない。面白いではないか。

「我を仲間にしたなどと、傲慢が過ぎるぞ青海人!! 貴様が我の配下になるのだ!!」

黄金の錫杖を頭上で振り回し構え、全身から放電し戦闘態勢になる。

さあ、私を楽しませて見るがいい!!

くエネル side out く

やれやれ、やっぱり説得だけじゃ無理があつたか。
でも、そこまで悪印象を与えた訳でもなさそうだ。
一体何がアイツの琴線に触れたのかわからないが……

「上等だ……俺が勝つたら仲間になつてもらおうぞ!!」

「ヤハハハハ!! 神に勝てるんでも思っているのか!!」

「ここまでできたらやるしかない。なんとかして戦闘不能にするしか……」

「神エル・トールの裁き!!」

「つて、考える暇もねえのかよ!!」

先ほどと同じ、いやそれより大きく強力な雷光が迫る。

だが、それは俺に当たる前に消失した。正確には俺の前の歪んだ空間に吸い込まれた。

一度効かなかったこともあり、そこまで驚いてはいないようだ。

それを確かめるかのように、2発、3発と連射してくる。

迫り来る雷光。もちろん一発たりとも当たりはしない。遠距離に対しては無敵だな。

しばらくすると攻撃が止み、エネルギーが問いかけてくる。

「その歪んだ空間が……貴様の能力か？」

「流石に気付くよな……自然系”ソラソラの実”、俺は”空”そのものだ」

”空”……だと？」

やはり理解しにくいようで、少し困惑したように見える。

「分かり難いよな……俺もそうだった。空間を支配する能力と思えばいい」

そういうと新しく歪めた空間から、先程の雷撃を発射する。

「何だと!？」

「魔法の筒……マジック・シリンダーとも呼びますかね？」

こちらに放っていた雷撃が全て戻ってくるのだ。堪ったものではないだろう。

相手が回避と防御に専念している間に、新たな空間を創り出す。少し時間はかかったが、上手く完成した。これで俺の勝ちだ。

「悪いね、エネルギー」

「…………それはどういう意味だ？こんな大道芸で、この神を倒せると？」

自らの技を全て受けきり、まだまだ余裕の表情を浮かべている。

「こんな勝ち方、卑怯だとは思うけど…………約束は守れよ」

「……………？…………ガッ!？」

次の瞬間、俺はエネルギーの目の前に瞬間移動し、鳩尾を全力でぶん殴った。

雷の身体が殴られる筈もない、そう油断していたのか、ロクなガードもしていない。なにが起こったのかもわからず、吹っ飛ばされたエネルギーは受け身も取れず気絶した。

「うし、まずは船と船員ゲットだぜ!!」

おっと、船が落ちるとマズいから、船の下の空間を固定し墜落を防いでおこう。
取り敢えず、エネルギーが起きるまで待ちましようかね。

第2話 1人目と目的地

「う……」

能力の練習をしながら時間を潰しているとようやく目が覚めたみたいだ。

「起きたか？気分はどうよ？」

「貴様……そうか……私は負けたのだな」

そう言いつつゆっくりと起き上がる。もう動けるのか。スゲエな。

「だが、悪くない気分だ。世界は広いものだ……いいだろう、約束は約束だ」

「え？」

「青海にも興味が湧いてきた……貴様と共に行くこととしよう」

あれ？もうちよつとゴネるかと思っただけど、以外にすんなりいったな。

「いいのか？自分で言うのもなんだがかなり怪しい男だぞ？」

「フン、限りない大地は常に天にあるのだ。多少の寄り道など問題ない」

そんなもんかね。またいつか行くって言いだしたらついて行ってもいいかもな。

「まあいいさ。これからよろしくな、神様」

「もう神ではない……もう一度やり直しだ。少なくとも貴様と、ゴムの男に勝つまでは」

こりや、事あるごとに戦わなきゃいけないさそうだな。いい修行になりそうだ。しかし綺麗なエネルってこんな感じなのか？

「いつでもかかってこいよ」

手を差し出し握手をしようとする。すると

「聞いていなかった。貴様の名は？」

そう尋ねてくる。そういや名乗ってなかった。この世界なら苗字はいらんか。思えばこの名前は能力にピッタリだな。

「“ソラ”だ。」

「……ソラ、貴様に付き合ってやろう。私はエネルギー。もはや神ではない、ただのエネルギーだ」

がっしりと握手を交わす。こうして、心強い仲間と船が手に入った。

「なあエネル、この“マクシム”って普通の航海は出来るのか？」

「どういう意味だ？」

「空島では確か白海だっけ……そこに浮かぶのか？」

空島の海で浮かぶのなら多分青海でも航行可能のはずだ。
期待を込めて尋ねてみたのだが

「わからん」

「はっ…っ…どうしよう…とっ…」

「この『マクシム』は大前提として空を駆ける方舟として造ったのでな。青海はおろか、白海で使ったこともない」

要するにあくまで飛行船であり海洋船ではないと……

「さらに言えば、ゴムの男との戦闘に、墜落した時の衝撃による破損。先程の貴様……いやソラ、お前との戦闘でさらに負担がかかっている。もはや、飛ぶのだけでギリギリの状態だ」

「……おいおい、なんだよそりや」

せつかく手に入れた船があっさり墜落して沈没なんて笑えねえ……

今はまだ俺の能力で固定しているからいいもの。

どうにかして直してもらわなきゃ、非常にまずいな。

とりあえず、動力源に案内してもらおう。中も広いな……

「しっかし、よくもまあこれだけのもん作ったな……」

見たこともないような機械に、巨大な歯車。

おそらく動力である雷を流すためのパイプがあちこちに組み込まれている。

「あれ？ エネル、こっちは違うのか？」

なんか、見た感じ重要そうな機械がズラリと並んでいるんだが。

「そこは飛行回路の部分ではない。この舟の力“デスピア”だ。

もつとも、回路の殆どがイカれてしまい、修復も困難だな。

ふん、やはりどこも損傷が激しいか……」

「デスピア？」

よくわからなかったので聞き返すと、要は雷雲を作る機械のようだ。元々はこれで、住んでいた空島を破壊し尽くす計画だったらしい。

「やはり、直そうにも部品が足りん……」

「なあ、こつちの部品は使えないのか？」

俺としては飛行機能があればいいので、こつちのデスピアは別にいらん。そう思っていたのだが、エネルにももの凄い嫌な顔をされた。

「んな顔されても……まずは動かせることにするほうが先だろ？」

「確かにデスピアの部品を回せば充分だが……」

雷雲を自由に製造し続けるこの回路を壊すのは……なんて言っているが、ぶつちやけ過剰戦力だぞこれ。国攻めなんてそうそうしないって。説得を続けても、なかなかいい返事がこない。

「あーもう、必要になったら雷雲くらい俺が作るよ」

天候を弄って、手の平大の雷雲を創り出す。

それを見たエネルギーは目が飛び出るほど驚いていた。

「……もはや、何でもありなのだな」

「正直、俺もそー思う」

驚きを通り越してもう呆れるしかない。

考えようによつては、あらゆる自然系の上位互換になりうるからな。

「よかろう、まずは飛行機能を優先して回復させる。

だが、青海を航行できるかどうかはわからん。

あくまでこの舟は飛行船であり、私も船の専門家ではないのでな」

専門家ねえ……別に飛べるだけでもいいのだが、最低限海に浮かぶようにはしておきたい。

となると最初の目的地はあそこかな。原作の流れ的にも丁度いいし、ルフイ達と接触

もできるか。

「とりあえずその方向で頼むわ。最低限飛べるようになったら少し高度を下げよう。最初に行くべき場所が決まったから、青海が見える所まで降りることにする」

船か島さえ見つかれば、目的地を探すことは出来るからな。

「ふむ、何処に向かうのだ？」

「水の都」ウォーターセブン。優秀な船大工が揃う、造船業の盛んな町だ」

第3話 猛特訓

「これが青海……本当に青いのだな……」

今マクシムは上空千メートルまで高度を落としている。

エネルギーが地平線の果てまで続く海を見て、感慨深いようにつぶやいた。

「どうだ？初めて見る青海、いや海の感想は？」

「……かつては青海などに見下していたが、これほど青い海が美しいとはな」
海を初めてみた奴と似たような事言ってるやがる。

「だが、能力者の身としては、辺り一面海というのは少々恐ろしいものだ」

「それでも人は海に出るのさ……自分の知らない、なにかを求めてな」

エネルギーは首を傾げ、よくわからないような顔を浮かべている。

「すぐにわかるよ。それがこの世界の魅力だからな」

「……そんなものか。まあいい、これからどうするのだ？」

「とりあえず、なんでもいいから船か島を見つける。んで、そこの人から情報を得る」

「……………見つかるのか？」

「知らん」

辺りは見渡す限りの青い海。船どころか島の一つも見当たらない。

不安になっているようだが大丈夫だろう。

「まあなんとかなるって。大丈夫大丈夫」

「……………」

いやー、偉大なる航路舐めてたわ。まさかこれ程なにも見つからないとは。だけど時間が取れたおかげで、大分やるべきことを進められた。

まずはマクシム、飛行能力を修復し飛行船として運用している。

嫌な予感的中し、海面に浮かばなかったのである。

ズブズブと沈んでいく所を慌てて救助したが、本気で危なかったよ。

多分余計な機能のせいで重量のバランスがおかしくなっているせいだろう。

これでますますウオーターセブンに行かなくてはならなくなった。

問題があるとすれば、飛行機能をそのままに海に浮かぶような改造ができるのかだ。

まあ、話を聞くだけでも価値はあると思いたい。

飛行に最低限の機能を確保したら、余計な黄金は外してもらった。資金源にもなるし、流石にあの顔黄金はいらないからな。

そして、戦闘力の向上の為に特訓。優先的に会得したいのはやはり覇気である。そのうちに戦うことになる実力者相手には、必ず必要になるからだ。

武装色はともかく見聞色に関しては、プロ中のプロが身近にいるからありがたかった。

「心綱^{マントラ}を教えろ？ どういうことだ？」

「あく、その前にまず、覇気について教えとくな」

この時の説明が一番大変だった。なんせ知識として知っていても俺は使えない、エネルギーの心綱も生まれつきのもものらしく、感覚で使いこなしていたようだ。

「確かに見聞色の覇気とやらは、心綱に似ているな……」

「そつちに關しては大丈夫だろ。問題はもう一つの方だ」

「武装色……それを扱える者の拳は、ロギアに届くというわけか……」

「そういうこと。格下ならともかく、熟練者相手に能力だけだと負ける可能性もある」
「確かに会得する価値はありそうだな……」

「そう言ってやる気を出してくれたところまではよかったんだけど……やっぱり神様はチートでした。」

「成程……武装色の覇気とはこういうものか……」

「……なんでたった3日間で出来てるんですか???

主人公のルフィですら使いこなすのに丸2年修行に費やしたつてのに……」

エネル曰く、自分の声を聞き、それを疑わず受け入れることで使えるようになったら

しい。

元々達人級の見聞色の覇気を扱っていたからこそ、あっさり発現したようだ。

ものは試しにお互い能力を禁止して戦ったら、ボコボコにされました。

そういえばエネルギーって、体術も相当の使い手だったっけ……

能力だけじゃ勝てない相手もいるぞ、と教えるつもりがモロに自分に返ってきた。

そのあといくつかコツを教えてもらい、多少荒療治に見聞色の覇気を発現させた。

え？方法？軽く死にかけた、とだけいっておこう。

武装色の方はまだまだ実戦で使えるレベルではないので要修行。

あと少し気になったのでエネルギーに「なんでMAX2億ボルトなんだ？」と尋ねてみた。確か落雷とかのボルトはもう少し出るはずだから、そこが限界のわけがない。

という訳でエネルギー専用のトレーニング空間を創った。

雷そのものが極端に発生し辛い空間で、力技で能力を使い続けてもらう。

初めは立つことすら困難みたいだったが、繰り返ししている内に少しずつ雷を生み出していった。

一度試しに空間を解除して、フルパワーで雷を起こしてもらった。

……以前の5倍近い出力と言っていた。もの凄くいい笑顔で。

ヤツバい、エネルギーの強化が止まらない。

どうやら特訓すること自体が新鮮で楽しいようで、毎日空間内で修行中だ。油断しているとあつという間に置いて行かれそうなので気合入れなくては。

そうして空島から降りて一週間ほど経った日のこと。

「ソラ、何かが見えた」

マクシムの天辺で修行中のエネルギーが甲板に降りてきた。

「お、マジで？よかったよかった」

いやー、このまま遭難コースにならなくてよかったよ。

俺も天辺に上り指差した方角を見る。どうやら灯台のようだ。

「人がいたら話を聞きたいんだが……取り敢えず行ってみよう」

そのまま船を灯台に近づけ、降りてみることにする。

こうすりゃ誰かいるなら出てきてくれるだろ。

「エネルギーはどうする？」

「ふむ……私も行くでしょう」

「わかった。一応船はここに浮かべておいてくれ」

一応安全策として、簡単な壁を削っておく。攻撃の心配はないが念の為。

二人で灯台に降りるとその脇に一軒家と駅らしき建物があった。
お、ここもしかして当たりじゃね？ 確かここに住んでるのは……

「ばーちゃんばーちゃん大変!! 大変だよ!! 空飛ぶ船がやってきたよ!!」

「なにいつてんだいチムニー、空飛ぶ船なんてある訳ないらろ〜」

やかましい子供と、酔っぱらった婆ちゃんが出てきた。

第4話 水の都“ウオーターセブン”

「にーちゃんたち海賊？あの船なに？どうしてとんでるの？」

あつ、あたしチムニー。こつちがゴンベと、ココロばーちゃん!!」

「ニヤーニヤー!!」

もの凄い勢いで質問攻めにしてくる少女と構ってくるウサギっぽい生物。

「俺はソラ。こつちはエネルギー。海賊……じゃないか。まだ」

いまだお宝探しも略奪もやってないから、ただの旅人か？

あ、でも船は強奪扱いだからやっぱ海賊か？

「ふむ……青海には奇妙な生物がいるものだ」

当の被害者は、謎生物の耳を引つ張ったり持ち上げたりと忙しそうだ。ウサギっぽい生物も、嫌がってはなきそうなので放っておこう。

「いや、あたしも長生きしてるけど、空飛ぶ船は初めてらねエ
一瞬お迎えが来たのかと思つたよ。んがががが!!」

ココロばーさんは随分ビックリしたようで、ベロベロに酔っていたのが覚めたよう
だ。

ちちゃんと話を聞いてもらえるようでよかった。

「ばーさん、ウォーターセブンってどこに行きたいんだが。
確か造船で栄えた町だったよな?」

「おう、よく知ってるね。あそこの船は世界政府御用達つてほどもからねえ。
優秀な船大工もいっぱいいるれよ。ここから北らがそこに行くのかい?」

「ああ。この船、飛ぶのはいいんだが海に浮かばねーのよ。改造とはいかなくても、なんか知恵をもらえたらなくと」

「んがががが!!そりやおめエ面白い!!」

「え!!あの船浮かばないの!!」

チムニーがビツクリしている。そりやお空飛べるのに沈む船なんておかしいよな。しょうがないの、そういう設計だから。海での運用を想定してないから。

ココロばーさんが「ちよつと待つてな」というので待機中。

その間に一本海列車が通過し、エネルギーが大層驚いていた。

チムニーに解説してもらって、ふんふん領いてた。

そういえばこの世界、蒸気機関つてあまりみかけないな……。

「おうお待たせ、コレ簡単な島の地図と紹介状ら。」

コイツを「アイスバーグ」って奴に見せるといい」

「おお、ありがとうばーさん」

欲しかった紹介状をもらえてラッキーと思っていたが

よくよく考えると、あまり大人数にこの船を見せるのは危険か？

この世界で飛行船なんてオーバースペック過ぎるかもしれん。

まあ、なんとかかなんだろ。最悪アイスバーグさんにだけ見てもらおう。

「エネルギー、そろそろ行くぞ」

そういうとエネルギーは領き、こっちに来る。なんか妙にゴンベに懐かれているな。

「あたし達も近いうちにウォーターセブンに帰るから!!」

「そんなときやなんか奢ってやるよ。んががが」

「期待してますよ。それじゃ、色々ありがとうございます」

「また会おう……」

エネルギーが何故かゴンベと言葉を交わしている……お前ホントどうした？
そう思いながら、マクシムに戻り船体を動かす。

「気をつけてねー!!」「ニヤー!!」

「なあエネルギー……」

「なんだ？」

「お前、あのウサギ？妙に気に入ってたな」

「ああ、動物と話せるのは新鮮だった」

「ふーん」

……て、ちよつと待て。

「はあ!! おま、喋れんの!!」

「なんとなくだが、心綱で伝わってきたからな。空島ではわからなかったが」

「覇気が強化されたせいか……?」

覇気の強化に伴い、とんでもない副産物が生まれたようだ。

「あのような生物にも、色々あるのだな……」

やっべく、神様やめてからの方が神様っぽいってどういうこと?

まあ、無駄にはならなそうだからいいけどさ。

「見えたな」

ようやくと島が見えたのでマクシムの高度を海面ギリギリまで下げる。正面から行くわけにも行かないので、初めから裏町に回る。ちようどよさそうな場所があったのでそこに停泊させる。

「これが……青海の大地か……感慨深いものだ」

先に船を降りたエネルギーがつぶやく。土を手に取り感触を確かめる。

「アップバーヤード神の島とは、また違うようだ」

「そりや島によつて土も違うし、環境も、住んでいる人も違う」

「成程な。これもまた〃未知〃か。それで？」

「あん？」

「これからどうするのだ？」

「そうだな……とりあえず最初に行くべき場所は決まっている」

あれがなけりやなにも出来ないからな。黄金を持って、換金所に行こう。

「あのサイズで50万ベリーとは……」

俺は正直黄金を舐めていた。ある程度の金にはなると思っていたが……

「ふむ、やはり黄金は青海で貴重品なのだな」

エネルギーが雷グローム・パドリング 金で作った黄金のインゴット。

まさかあんなサイズでこんな金額になるとは……

もしかしたらばられた可能性もあるが、船にまだ黄金はあるしいいや。

「ほい、とりあえず10万渡しとく」

「……何故だ？」

「色々見て回りたいたら？その金は使い切ってもいいから楽しんでこい」

換金所に来るまでもどりをキョロキョロ見てたからな。

ガキじやあるまいし、と思ったが目に映るもの全てが新鮮なのだろう。

「ふむ、そういうことならありがたく頂こう。ソラはどうするのだ？」

「俺は必要な物買ったら、アイスバーグさんを探すよ」

もし改造するんなら、どの位時間がかかるかわからないし。
アクア・ラグナに捕まるのは御免だからな。

「そうか。私も終わり次第、船に戻ることにする」

そういつてエネルギーは目につけていたと思われる店に入っていた。
あの様子だといくらかかるか、丸一日くらいはかかりそうだな。

「とりあえずは、こんなもんか……」

食料、水、薬など最低限必要なもの。あとは衣類やら生活用品。

それから偉大なる航路で必ず必要になる記録指針^{ログポイント}。

いや、あつてよかった。売ってなければ他の海賊から強奪しないといけないトコ
だ。

「そしたら、人探しと行きますかね……あれ？」

アイスバーグさんを探しに行こうとしたら、エネルギーが帰ってきた。すんげえ大量の荷物抱えてるけど……まさかあの金使い切ったのか？

「早かったな、観光はもういいのか？」

「ああ、それよりも気になる事ができたのでな」

その背には大きな袋を背負っている。荷物の中身はほとんどが本だった。ジャンルもバラバラで統一性が見られない。小説、手記、医学書、童話などなど。

「空島ではこういった書物は貴重だったため、あまりの蔵書量に驚いたぞ。本屋、とは素晴らしい店だ。全て買ってよかったのだがな」

それを差し引いても買い過ぎだって……500冊以上あんじゃね？

「まあいいけどさ……と、そうだ。ちよつと頼んでいいか？」

適当に歩いて探すつもりだったが、いいタイミングで帰ってきてくれた。

「なんだ？今から私は忙しいのだが……」

露骨に嫌そうな顔をする。そんなに本が読みたいか……

「すぐ終わるよ。この島で“ンマー”って言ってる奴はどこにいるかわかるか？」

空島スカイピア全域の“声”を聴けていたなら、この島もいけるんじゃない？

そう思い、口癖からアイスバーグさんを探してもらうことにした。

エネルギーが目を伏せ、心綱に集中している。上手くいけば儲けもん位の気持ちだった
が、

「ふむ、奇妙な場所にいるな」

「あん？中心街じゃなくてか？」

「誰かと話しているようだが……」

「見つかっただけラッキーだ。方角だけ教えてくれ」

「ああ。ここから……」

方角を聞き、そちらに空を駆けていく。しばらくすると見えたのは

「たしか……廃船島だったか……」

「ンマー、今日もしつこい連中だった。こんな所まで呼び出して……」

「つと、あなたがアイスバーグさん？」

そこにはウォーターセブン市長にしてガレーラカンパニー社長。

世界最高峰の造船技術を持つ男、アイスバーグが居た

空から話しかけたら、すっげえ面白い顔になってたけど。

第5話 アイスバーグさん

「ソマー……驚いた……おめエさん、何者だ？」

「俺の名はソラ。あんたに頼みがあつて探してたんだ」

身内大工達の身体能力が高いとはいえ、正真正銘“空を飛ぶ人間”は初めてなのだろう。

まあ、俺も目の前にいきなり空飛ぶ人間が現れたら驚くしな。

「ほいコレ、ココロばーさんの紹介状」

「ココロバーさんから？どれどれ……」
「ふねみてやんなよ ココロ（ε）——☆Ch
u」

ビリビリッ!!

「つて、おい!!なんで破く!?!」

「キスの顔文字が不愉快だった」

「え〜……」

「ンマーいいさ。誰か人を寄越してやるからソイツに……」

「あく、出来ればあんまり大人数は……」

ただの船じゃないからな。見る人は少ない方がいい。

「なにか訳アリの船か?……まアいいさ、気晴らしにはなるだろう」

どうやら見てくれるみたいだ。よかったよかった。

ここで違う奴、特に政府側の人間は勘弁だったしな。

が、
アイスバーグさんを連れてマクシムまで戻る。俺としては普通に歩くつもりだったが、

その時にせがまれて空中を歩くことになった。島全体が見渡せる高度まで上る。

「ソマー、これは大変気分がいいな……悪魔の実の能力か？」

「ご名答……自然系」ソラソラ」の実。俺は空人間だ」

「空」……なんとも理解しにくいが……」

ウォーターセブンを眼下に見据え、感慨深げに話す。

「このような景色が見れるのなら、悪くない能力だ」

「そうっすか。そりやよかった。下りはもっと面白いですよ」

「なにイ……」

“空中回廊”

空中をレーン状に固定し、滑りながら降りれるようにする。
一旦滑り出すと、ジェットコースターに乗っている気分だ。
俺が前を滑り、後ろからついてきてもらう。

「ンマー！！！！これは気持ちいい！！！！」

アイスバーグさんもご満悦のようだ。見事にバランスをとって滑空している。
そんな事を考えていると、すぐにマクシムが見えてきた。
傾斜を緩やかにし、減速する。つと、着地成功。

「これは素晴らしい！！もう一回乗せてくれ！！」

「あ、先に船見てくださいよ。その後なら……」

「絶対だぞ!!」

どうやら予想以上に気に入ったらしい……これ制限しないと何回も頼まれそうだ。

「で、見て欲しい船ってのは……」

そう言いながらマクシムを見る、が会った時くらい驚いている。……急にこちらを向くと、

「おめエ……こんなもんどこで手に入れた……」

と、若干ドスの効いた声で尋ねてきた。やっぱ見せんの失敗だったか……

「……………空島スカイピア」

正直に答える。そうすると一転、なんともいえない表情になった。

「空島……………だと……………」

そういうと、何かを考えるように黙ってしまった。

「……………までの技術……………」とか「まさか古代……………」とか物騒な呟きが聞こえる。

「おめエよ……………この船で何をやる気なんだ？」

「なにも」

咎めるような問いかけに躊躇わず答える。あまりの即答にこっちに振り向く。

「俺はただ、自由に生きてただけだ。この世界を」

「……………」

視線が交錯する。しばらくすると緊迫した空気を崩すように息を吐いた。

「ふう……そうかい。んで、この“空飛ぶ船”を俺に見せて、どうしたいんだ？」

「見ただけでわかるのかよ……あんたも大概化けモンじゃん……」

とりあえず、この船が空を飛ぶこと、海に浮かばないこと、
どうにか海を進めないかと、相談することにした。

その過程で内部も見せることになったが、この人なら大丈夫だろう。

一応、製作者の許可もとったしな。

結論から言うと……かなり無理矢理の方法を教えられた。

正直驚いた。俺じゃなんで沈むのかもわからなかつたから。

沈む理由は簡単だった。ただの過積載。中に詰まっている機械が重すぎた。

考えてみれば簡単な話だが、これを削ると飛べなくなるので本末転倒だ。

まずは余計な部分を徹底的にカットし船体を軽くしろ、と言われた。

ああ、その過程でイイモノが見つかった。これはラッキーだ。

それでも駄目なら最終手段があるらしい。それが、

「左右に一隻ずつ、船を接続しろ」

とのことだった。要は三胴船のような形にすることで、

足りない浮力を補え、という事らしい。

……なんでタダで船が手に入ったのに追加で二隻も買うんだ……

それなら俺かエネルギーが頑張つて、長時間電力を補給出来る手段を身につけたほうがいい。

そんなわけで、マクシムの改造は見送ることにした。

ふと気になり、これをもう一隻作れるか聞いてみたら、

「作れるが、肝心の飛行機能が使えないんじゃない意味がない」

やはり、雷のロギア級のエネルギー源がなければ宝の持ち腐れのようだ。

「色々ありがとうございました」

「シマー、気にするな……おれもこんな珍しい船に触れられて満足だからな」

かなり長い時間拘束してしまったが、全然気にしていないようだった。そのあたりは、造船技師としての性だろうな。

「これからどうするんだ？」

「少なくとも、記録が溜まるまではゆっくりしますよ」

「そうか、近々アクア・ラグナが来るからな。それまでには船を……」

そこまで言いかけて止める。実際どんな波が来ても飛んで逃げれるから関係ない。

「お察しの通り」

「まあ、必要なら倉庫の一つくらい貸してやる」

「お、そりやありがたい」

あそこにもっていく必要はないしな。わざわざ政府の奴らに見せることもない。

「飛行船か……いつか作ってみたいもんだ」

まあ、現状じゃオーバーテクノロジーもいいとこだしな。

「暇になったら本社に來い。茶ぐらいは出してやる」

「了解です。それじゃ今日はホントにありがとうございました」

そういうと、アイスバーグさんは帰っていった。

結構ためになる話も聞けたし、来たかいがあるつてもんだ。

さて、これからちよつとだけ平和かな……取り敢えず、修行だな。

「さて……今日か……」

「何がだ？」

いつもと違う様子に、不思議そうにエネルギーがこちらを見る。

アクアラグナ襲来の日、行動に移ることにする。

「自由に生きる為に、世界と戦うのさ」

「ほう……世界とは、また大きく出たものだ」

凜猛な笑みを浮かべる。そろそろ身体が疼いているのだろう。

「その前に、接触しておく奴がいる。エネルギーもよく知ってる奴だよ」

「……………麦わら」

不満そうに顔を歪める。

「いきなり喧嘩すんなよ。むしろこっちに留まらせた恩人って思つとけ」

「ふん……………」

あまり納得はしていないようだが、ここは我慢してもらおう。

「まあよい……本当の狙いは誰なのだ？」

「一回、格上の覇気使いとやりあっておきたくてな」

この能力で、どこまで経験不足をカバー出来るか知っておきたい。
だからこそ、狙うのはやはりあの男。

「世界三大勢力、海軍本部」 大将「青キジ」

第6話 運命の日

く 麦わらのルフィsideく

「ロビンは私達の為に……死ぬつもりなのよ!!?」

「!!?じゃあやっぱりロビンは……ウソついてたのか……!!」

「ぶん!!!!」

「よかった……!!!!」

もう迷わねエ……仲間は……絶対に守るんだ!!!!

「安心しろ……!!ロビンは絶対死なせねえ……!!」

こんなところで……時間食ってる場合じゃねエ……とつととこんな場所から……

「やれやれ……私はこんな男に負けたのか……」

……？ナミの声じゃねえ、誰だ？

「さっさと出て来るがいい。我が友の頼みだ」

ズドン！！！！

うわ！！なんだ！！いきなり挟まれていた建物が崩れてくぞ！！

でも、確かに今聞いたことある声が……って、それどころじゃねエ！！！！

「いくぞ、ナミ！！！！」

「わ！！！！」

待ってろよ……ロビン!!!!

side out

「全く、何なのだあの男は……」

どうやら、挟まっていたルフィに呆れているようだ。

まああんなミラクルな挟まり方、早々有り得ないからなあ。

「まあまあ……そういう意外性も、負けた原因かもよ?」

そういうと、ますます複雑そうな表情になった。

「んじや、俺も行くとしますか……」

「何? どうするのだ?」

折角だし、やってみたい事がある。

「ああ、あの波止めてくる」

「……ハ?」

間抜け顔のエネルギーを尻目に、ルフィの所に向かう。

お、どうやらゾロも無事脱出出来たようだ。

ホントにヤバそうなら介入するつもりだったけど。

「?! おいお前!! アブねエぞ!!」

突然現れた俺にかなり驚いたようだ。

叫んでいるルフィを背にアクアラグナに対面する。

しっかし、目の前で見るとマジで馬鹿でかい波だな……

第一印象って、大事だね。派手に行きますか!!

「バリアーだぜ!!」

バガアアアアン!!!!!!!!

空を〃固定〃して波の侵入を防ぐ。こんだけ広範囲は初めてだけど上手くいくもんだ。

「指を結べばバリアを張れる」子供でも知ってる常識ってね」

そういや、バル君には会いたいな……どこにいるか全く知らないけど。

きつちりアクアラグナを止めゆつくりと後ろを振り返る。

そこには驚愕の表情を浮かべる“生” 麦わらの一味が四人。

うお、本物はやっぱりスゲエかつこいい!!

バルトロメオがあんだけ泣き腫らすのもわかるぜ……おっと、何か言わないと。

「初めまして、“ 麦わらのルフィ”」

やっべー、緊張するわ。おかしいトコないよな？

「……………」

「あのく……………」

ノーリアクション……ちよつとやりすぎたか？最初はインパクト重視でいって

「スツゲエエエエ!!!!!!何だ今の!!!!!!」

と思っただら、目をキラキラさせて叫び出した。

「おめエがやったのか!! スツゲエエエ!! って誰だ!!」

おう……凄いい剣幕で畳みかけてくる。

「とりあえず、もう少し上行こうぜ? また波が来る」

「そうだな!! で、おめエ誰だ?」

やばい、エンドレスになりそう。

「俺の名はソラ、一応海賊だ」

自己紹介だけ済ませて、一先ず造船島まで上がることにする。

「そんなに警戒しなくても、大丈夫だよ。ロロノア・ゾロ」

さつきから警戒心剥き出しの男の顔を見る。

「……能力者か？」

「ああ。少なくとも戦う意思は無いから」

「……まあいいさ」

やつと、敵意を押さえてくれた。うーん、大迫力。

そうして造船島まで上がると、大勢の人に有り得ないモノを見る目で見られた。

「ま、俺のことはともかく……ナミさん、話すことあるんでしょ？」

「(なんで私の名前?) ……そうね。ルフィ、ゾロ。話すことが色々あるわ」

ナミさんが事情を説明している間、大工が話しかけてきた。確か名前は……

「パウリーさんでしたっけ……何でしょう？」

「おめエさん……何モンだ？」

「何者って……ただの海賊ですよ。アイスバーグさんの知り合いでもありません」

「ああそういえば……とても面白い能力の奴に会ったと言っていたが……」

「それ多分俺の事ですな」

アイスバーグさん、どんな説明してんだか……

「今年のアクアラグナは別格だったが……あれを止めるとは一体どんな」

「おーい！ロープのやつ！」

ルフィに呼ばれたパウリーさんは、そっちに行ってしまった。
なんか聞きたい様子だったけど。今の内に……

「相変わらずその能力……非常識にも程があるな」

呆れた様子の子の空中で待っているエネルギー。いや、お前も多分出来るぞ。
あん位の海水なら、一瞬で蒸発させそうだし。

「マクシムの移動は済んだか？」

「ああ、言われた倉庫に移しておいた。だが、どうやって目的地まで行くのだ？」

流石に俺もエネルギーも船を離れて、空中に置いとくのは不安だしな。

「もう一つの海列車があるようだから、それに同乗かな」

エネルギーと共に、下に降りると、話がまとまっていた。

原作通り、ロケットマンでエニエス・ロビーに突っ込むらしい。

後ろから着いていくと、壊れた倉庫に辿り着いた。あの人も多分いるはずだ。予想通りそこには、列車の整備をしていたアイスバーグさんがいた。

「動いて大丈夫なのか？」

「お前……なんでここに」

「コイツの向かう先に要件があつてな」

「……そうかい、無茶するなどは言わねエが、死ぬなよ」

「一応覚えとく」

「ウォーターセブン発エニエス・ロビー行」ロケットマン「出航するよ!!」

ココロさんの声が響く。それにあわせて車両にしがみつく。

「よし、出航!!行くぞオ!!全部取り返しに!!!!」

ルフイの号令で海列車が出発する。線路を捉え急加速する前に中入つとこ。

「あそこは特等席じゃねエな……ふっ飛ぶかと思ったぞ……」

「……ちよつと待て。この車両におかしな奴らがいるぞ」

「おい、そりや誰だ」

ガレーラの2人と俺が聞き返す。

「お前らだよ!!!」「いやおめエもだよ!!!あと何であんたここに乗ってんだ!!!」
パウリーに突っ込んだ流れで、ゾロが俺を指差してくる。

「え?俺?」

「あ!!さっきの奴!!」

ルフィは今更気が付いたのか、ビックリしたようだ。

「まあ気にすんな。成り行きだし」

「成り行きって……お前これがどこに向かっているかわかってんのか?」

呆れた声でゾロが呟く。

「わかってるよ。世界に喧嘩売るんだろ？大丈夫、俺達強いから」

「おいおい……つて、俺達？」

「ああ、俺の仲間。ルフィ、君も知ってる奴だよ」

そういうと、首を横に傾げよくわかってない顔をする。

「ヤハハハ……久しいな、ゴムの男」

その声が響いたとたん、ゾロが戦闘態勢に入る。

「あ!!てめエ、耳たぶ!!」

その姿を見た途端、食って掛かる。まあしようがないか。

「やめておけ、今は戦う理由がない」

「空島の神が、何でここに居んだよ!!」

「あ、俺が仲間にしたから」

そういうと、ゾロに信じられないモノを見る目で見られた。なんか今日これ多いな。

「信じらんねエ……神を仲間にするなんざ……」

「もはや神ではない……ただのエネルだ。ゴムの男よ」

エネルとルフィが向き合う。

「あ!!挟まった建物ブツ壊したのおめエか!!どつかで聞いた声だと思ったら!!」

警戒している。当然か、つい最近やり合った相手だもんな。

「私は強くなる……今よりもつとな……その時再び貴様と戦う。
その時まで、死んで貰っては困るのでな」

そういうと助けてもらったことに気づいたのか、警戒を解きいい笑顔を浮かべたル
ファイが

「おう!!何時でもかかってこい!!」

あら、思ったより揉めなかったな。一回バトル位は覚悟してたけど。

「おいらファイ!!」

「いいじゃないゾロ。少なくとも今は敵じゃないでしょ」

ゾロは納得していないようだが、ナミさんが諭してくれた。
チョップパーはまだビクビクしてるけど。カワイイなおい。

「おい麦わら!! いい加減説明しろ!! コイツら誰なんだ!!」

あ、ガレーラとフランキー一家忘れてた……まあ説明は丸投げでいつか。
とりあえず、乗車は成功かな。

「んががが。まさかおめえらも居るとはね」

「ココロさん、その説はどーも」

運転席から離れたココロさんが話しかけてくる。

いくら制御不能とはいえ、運転席空っぽはどうかと思うけど……

「ばーちゃんばーちゃん、アクアラグナが来てるよー!!」

「ニャーニャー!!」

つと、そーいゝや列車にも一発来たつけ。

「ルフィ!! 列車が大波にぶつかっちゃわ!!」

「せっかく同じ方向むいてんに、バラバラに戦っちゃ意味がねエ」

ルフィ、パウリー、俺、フランキー一家の……名前なんだつけ? 四人で腕を組む。

「いいか、俺たちは同志だ!!!!」

こーいうところが、霸王色のカリスマなんだろうな。

「大波なんかやられんな!!!! 全員目的を果たすんだ!!!!」

「行くぞオ!!!!」 「ウオオオオーツ!!!!」

「んががが。さーおめエらこの波なんとかしてみせなア!!!!」

フランキー一家がキングブルに戻り大砲の準備をする。そんなや、俺も手伝いますか。

ルフィ、ゾロ、パウリーも続々屋根上上がる。

「おし、駄賃代わりだ。まずは俺がやるよ」

くゾロsideく

いきなり任せろ、たア随分な自信だなコイツ……

あの神を仲間にしたなんざ、早々信じられるモンじゃねエ……

うちの船長はあっさり受け入れたが、コイツらは目的も怪しい……正直信用できねエ。

「そうか!! ソラ、一人でだいじよぶか!!」

「んー、まあ駄目だったら後は頼むかも」

「まったく、ちょっとは人を疑えつての……」

あの波を越えるようにするって、そんな簡単じゃないだろ。だが、島であのクラスの波を止めたのは事実。

「見せてもらおうじゃねえか……」

「余計な心配だぞ、青海の剣士よ」

!!隣に神がいつの間にか居やがる!!

「てめエ……それはどういう意味だ？」

「ソラ能力は異常だ……私ですら理解できん……使った勝負で勝てたこともない」

「何……だと……」

俺があっさり負けた奴より、遥かに上だと!! そんなこと

「磁界創生……空間固定……撃ち抜け、超電磁砲^{レールガン}」

何か呟く声が聞こえたと思ったら、次の瞬間には、大波のほとんどが消滅していた。

「……嘘だろ……」

「だから言ったであろう。異常だと」

「誰が異常だよ、エネルギー」

「ふん、周りの者共の顔を見ろ」

誰もが驚いてやがる……当然だ。あの大波を一瞬で消し去るなんざ……

「てめエ……なんの能力者だ……」

思わず訊いちまったが、教えてくれるとは思えねエ……

「自然系」ソラソラ」の实。空人間だよ」

そういうと、目の前で浮かびやがった……猛スピードで動いてる列車の上で……

「意味がわからねエ……」

わからねエが今は……味方だつー言い分を信じるしかねエ……

今コイツらと戦っても、無駄な体力を使うだけだ。

少なくとも戦力にはなるようだしな……

side out

第7話 司法の島“ エニエス・ロビー”

「見えたぞ、不夜島の光!!」

ホントに速いなこの列車。あ後は対抗意識でも湧いたのか、

ルフィとゾロが大暴れ。車両乗り込んだり真つ二つにしたりと大活躍。

途中でヨコヅナに衝突してキングブルと離れたり、

ココロばーさんとヨコヅナの会話にエネルギーが領いてたり、

先行していたサンジさんとウソップ（今はそげキングか）と合流したりと大忙し。

あ、エネルギーを見たサンジさんとウソップが、

「なんでこんなトコロに神がいやがる!!?」

「イヤーーーー!!!!!!」

予想通りのリアクションを頂きました。

何とか事情を説明してバトルは回避したけど……

「……………うさんくせエ……………まあいい、ナミさん。ついでにその他アホ共」

サンジがロビンについて話し出す。

まあそれを聞いてルフィが止まるハズもなく、むしろ憤ってたな。

その後全員で作戦会議に入る。ルフィ達をCP9に当て、周りがそれをサポートする。

大雑把に言えばなんてわかりやすい作戦。あれ？俺たちは？

「ソラさん達も、出来れば強い奴を担当してくれ」

ほいほい、了解つと。

「タイムリミットはあの門を2人が通るまでだ!!急ぐぞ!!」

「作戦通り俺たちは先行する!!援護は任せてくれ!!」

「おい、そこ二人はこっちじゃねエのか」

ガレーラの職人とフランキー一家が叫ぶ。

ちやつかりナミさんとウソツプが混じってますが……

「あれ?ルフィは?」

チヨツパーが気づいてキョロキョロ探す。カワイイ。

が、もう遅い。もう正門の鉄柵によじ登ってる。

「……なにやっつてんだあいつは勝手に!!」

「あの人作戦全然わかってねえ!!」

「ムダだった」「わかったっていったよな」「5分待つとか」「無理だろ」
ありや、麦わら一味の皆さんはもう慣れっこのよう。

さて、どうするか……このまま車内で待つか、ルフィを追うか……

「遅れをとるなソドム!!ゴモラア!!」

フランキー一家も鉄柵に突っ込んでいく。

このまま待機でもいいかな、と思っていたのだが。

「ソラ、私は先に行くぞ」

「え？」

なんだかやる気満々のエネルギーが話しかけてくる。

「ここで待つのも退屈なのでな。それに今の力を計るいい機会だ」

なんかどれだけ強くなったか試したいようだ。

……子供か!!

「了解。そんじゃ俺も行くわ」

なんか目エ離すと危険そうだ。

「ついでに門開けとくか……」

エネルと共に離れていくキングブルに乗り込む。

「おい、フランキー一家」

「うえ!! ソラさん!!」

先行するキングブルに乗り込み、砲弾を一つ拝借する。

「とりあえず、鉄柵と正門開けるから。雑魚処理は任せる」

訳がわからないという顔の面々を尻目に、砲弾を構える。磁界を形成し、狙いを定め

「超電磁砲」

パリツ……

ズドオン！！！！

「うっし、こんなもんだろ」

やっぱり実弾だとある程度まで加速させると溶けちまうな。

ま、鉄柵と正門に穴は空けたから充分だろ。

「んじゃ、行くぞエネルギー……あれ？」

隣に居たはずのエネルギーの姿が見えない。

「アイツ、どこいった？」

「あゝ」

「ん？」

後ろで固まっていたフランキーの部下が再起動し話しかけてくる。

「ソラさんがアレ撃った瞬間、光って消えちゃいました……」

……あのヤロウ……俺が超電磁砲撃って出来た軌跡に乗って先行きやがった……

くエネルsideく

ふむ、やはりソラが作った空間は動きやすいな……

雷が100%力を発揮できるといったところか。

しかし、“声”が多いな……少なくとも一万近い人間がいるようだ。確か海軍といていたが、どれほどの強者がいるのか……

穴が開いた一つ目の門を越えると、まるで空島のような景色だった。滝に囲まれた島が中央に浮かんでいる。だが敵の数は少ない。

「強い“声”は……」

どうやら、更に奥の門の向こうらしい。

「5億^{ボルト}V……」

我が道を妨げるものは、排除するだけだ。

修行により出力が大幅に上がった雷の力……存分に試させて貰おう!!
右腕を雷に変質させ、そこにさらなる雷を纏わせ留める。

— 万物を打ち砕く雷の鉄槌を—

「^{トールハンマー}打ち砕く雷光!!!!!!」

ズドオオオン!!!!!!

第8話 強行突破

「ルフィside」

「おい」 麦わらのルフィ「……」

辺りの建物からゾロゾロと海兵が出て来てきやがる。

「仲間は何十人連れてきたんだ？」

「ハハハ……どれだけいようが無駄だがな」

「エニエス・ロビーの兵力は」 一万「だぞ!!!」

「ああ……おれは一人だ。道をあけろ!!!」

こんなトコで止まるか!!ロビンが待ってんだ!!

「海賊如きが……海軍を舐める　　”ズドオオオン!!!!!!”

……な?」

なんだ?!通ってきた門からすげエ音がしたぞ?!

「何事だ?!」

「わかりません?!本島前門から轟音が!!」

「ヤハハハ……敵が固まっているとは好都合」

「?!?!?!貴様、いつの間に?!」

「あ!!てめエ耳たぶ!!」

「エネルギーだ麦わら……その呼び方は不快なので今すぐやめろ」

いつの間にかすぐ隣に耳たぶが来てるじゃねエか!!

「こんな所で時間を無駄にはできんのだろう?少し伏せていろ」

「おい!!なにすんだ!!」

いきなり上に飛び上がってピカピカ光って消えた。

「6億ポルトサンダーバレーV轟雷陣」

side out

「派手にやったな……」

二つ目の門が見るも無残なほど粉碎されていた。
多分犯人はエネルギーだろうけど、なんつー破壊力……

「まあこれなら楽に通過できるけど、作戦の意味がないな」

もう門が二つ解放されてるし、ロケットマン組もすぐ来るだろ。
そう思い本島前門を抜けると、前方で何かが光った。

ズドドドドオン！！！！！！

次の瞬間響き渡る爆音。つーかアイツ暴れ過ぎだ!!
急いで光った地点に向かうことにする。

そこにはデカイ声で口喧嘩をする二人の姿が見えた。
足元一面がクレーターになってるがなにしたらんだアイツは……

「おめーなにすんだ!!アブねえだろ!!」

「ふん、貴様に雷は効かぬのだろうか？寧ろ敵が減ったことを喜べ」

「んだとオ!!」

エネルの言った通り、周囲の敵はほぼ全滅している。
パツと見ただけでも、二百はいったかこれ。

「まーまールフィ、抑えて抑えて。揉めんのは後にしようぜ？」

今にも掴みかかりそうなルフィをなんとかなだめる。

「あ!!ソラ!!おめエも来たのか!!」

「とりあえず迫ってくるのは俺達が叩くから、

ルフィは余計な体力使わないで、真っ直ぐ裁判所を目指しな」

「わかった!! ありがとう!!」

話を聞くや否や走り出すルフイ。ホントにわかったのかな……

「ソラ、こんな雑魚をいくら潰しても何の価値もないのだが」

エネルギーが文句を言ってくるが違うからね？

ここに居るのはそこそこの精鋭だからね？

お前が強すぎるだけだからね？

「もうちよい我慢しろ。こんだけ暴れりゃ、もっと強い奴もでてくるさ」

「だと、いいのだがな」

「どけエ!!!!」

「ヤハハハ!!弱い!!弱すぎるぞ貴様ら!!」

……いやー、予想通りつつたら予想通りなんだが……
ちよつと強すぎないか?あの二人。

ルフィはもちろんだがエネルギーがやばい。

並走しているハズの俺に敵がほとんど回ってこない。

まず、心綱で敵の位置を索敵、前方広範囲に雷発射。撃ち漏らしを俺とルフィ。

まあ、雷の速度についていけるような奴がそうそういたら驚くけどな。

そうこうしている内に、あっさり裁判所前広場に辿り着いた。

「あそこ行き止まりっぽいな!!」

閉ざされている正面入口を見て、ルフィが屋上に飛ぼうとする。

「足場作ろうか?」

「そんなことできんのか!!」

流石にこの高さを一足飛びは厳しいだろう。お任せあれってね。

「空中回廊」

裁判所屋上まで、向かいやすいようなルートで足場を形成する。ブルーノ戦はルフィに任せて大丈夫だろう。圧勝だろうし。

「ありがとうソラ!!」

「気をつけろよ!!」

さて、そろそろ強めの奴が出てきてもいいんだけど……
そう思っているといきなり巨大な鉄球が飛んできた。

「バリア」

あっさり防ぐと鉄球を投げてきた奴が物陰に隠れやがった。

「ほう……先ほどの雑兵よりは気配が強いが」

瞬時にエネルギーが追撃の雷撃を放つ。気配が三つほど消えた。

……マジで俺いらなくね？

「この程度か。だが数はいるようだ。少し間引いてこよう」

そういうとエネルギーは迎撃に向かう。俺はどうすつか……

とりあえず、後続組が来るまで、裁判所内の敵減らしとくか。

「貴様も侵入者か!!」

「見りゃわかんだろ」

さて、ちよつと思いついたことがある。

自然系であれば、身体全てを変換出来るはず。

この能力に慣れてきた今なら出来るかもしれない。

いきなり試してみることに恐怖はあつたが、いい方法を思いついた。

今の状況のように、室内でやってみるということ。

建物の中といった、空間を把握しやすい場所なら自分を見失わず済むのではないか？
裁判所一階部分をイメージして、能力を発動させる。

「ま、ものは試しつてね!!」

「何をブツクサ言っている……!!」

「消えた!!どこにいった!!」

「どこかに隠れているはずだ!! 探せ!!」

ふむ、上手くいったみたいだ。海兵達にはいきなり消えたようにみえたはず。俺は入ってきた位置から動いてはいない。やはり、密閉空間なら全身変化も可能のようだ。

「室内専用って、どこが〃空〃なんだか……」

おそらく空になっている時はいかなる攻撃も当たらず、こちらからは攻撃可能という無敵状態。覇気が絡むとどうなるか未知数だが。そして把握している空間なら自由自在に操れるということ。

グラビティフォール
「重力降龍」

そうつぶやくと室内の重力が急激に変化し、全ての人間が倒れた。まあいきなり、100倍近い重力がかかったらそうなるわな……

これだけならよかったのだが、致命的な欠陥が見つかった。空になっていられる時間が、もって一分程度ということ。

「これ……慣れないと……頭がいかれるな……」

あまりの情報量に吐き気が止まらない。

空間内全てに、俺と同じ感覚の分身がギツチギチに存在している感覚だ。こんなもん屋外で使ったら頭おかしくなるぞ………どうにか対策考えないと。

この戦い方は正真正銘奥の手だ。基本的には封印だな……

なんでロギアの基本戦法が奥の手になるんだか……

外の空気を吸うため出ると、思ったより早くロケットマンが到着した。

……つーかあれ止まれないのか？すんごいスピード出してるけど。

嫌な予感は的中し、一切の減速無しに入り口に突っ込んでくる。とりあえず、クッションっぽいのは作って衝撃だけでも和らげよう。不安になったがどうやら無事のように、続々中から出て来る。

「あゝ、大丈夫か？」

「……大丈夫に見えるか？」

ゾロが不機嫌そうに返してくる。だって他にいいようがないよ……

「おい、ルフィは屋上にいるのか？」

すでに見えていたようで上を指差すサンジ。

「ああ。さつき上がったばっかだけど」

「なに？俺がみた時はもうCP9と戦ってたぞ」

どうやらブルーノ戦はもう始まっているようだ。

「つか、おめエはなんでここに居る？」

咎めるように言われたが、確かに逃げてるように思われてもおかしくないか。

「裁判所内の制圧と……」

先程と同じように、空中回廊を発動する。

「屋上までの最短距離の確保。必要だろ？」

ゾロが驚いた顔をする。しばらくすると理解してくれたようで、

「助かる!!」

一番に駆け上がった。これなら迷子にならないだろ。

「てめエマリモ!!俺より先に行くんじゃねエ!!」

「あ、ちよつとサンジ君!!」

「すつげー!!空に道が出来た!!」

続けて、サンジ、ナミ、チョッパーと続く。あれ?そげキングは?

不思議に思っていると、フランキー一家と、巨人二人が到着した。

「ソラさん!!ご無事で!!」

キングブルの上から大声で話しかけてくる。

「ああ!!麦わら一味は屋上に上がった!!それよりその巨人は!!」

「任せて大丈夫か？」

ちよっぴり不安になったがここは信じよう。

倒し損ねた兵たちが殺到してくるだろうし、

挟まれないように裁判所内の敵を落としておくべきか。

「もちろんでさア!! ソラさんもご無事で!!」

「頼む!!」

裁判所の防衛、跳ね橋のスイッチを任せ、裁判所内に戻る。

さつき大方倒したと思っただが、二階からさつき以上の敵が湧いていた。

ロケットマンが通るかもしれないし、一階は開けておきたい。

「鬱陶しいなこの数!!」

「ソラ？」

後ろから呼ぶ声が聞こえたと思っていたら、エネルギーが戻ってきていた。

「何だ!!」

周りの敵を蹴散らしながら話しかける。

「なに、先程お前の気配が突如巨大になったのでな。少々気になった」

つまり俺が空になっている時、心綱で見たのだろう。

エネルギーが言うには気配そのものが、急激に大きくなったらしい。

見聞色の覇気で見えたつてことは、武装色の覇気で殴られる可能性が高い。

やっぱり青キジ相手にこの戦い方は危険だな……

「それは後で説明する!!先にこの建物内の敵をブツ倒す!!あ、建物崩すなよ!!」

「よかろう。加減するのは苦手だが……善処しよう」

最低でもルフイ達が司法の塔に渡るまでは破壊できない。
行つた後なら別にいいけど。

その後は一気に状況が動いた。

裁判所内の敵の殲滅。跳ね橋の起動。あ、エネルギーが迫撃砲ほとんど潰していたらしく
普通に橋はかかった。ロケットマンの援護が終われば、上に登りながら敵を倒す。

そして馬鹿な司令官が、最悪の一手を打った。

「バスターコールをかけたままア〜!!!!」

さて、ここからが本番だ。

第9話 バスターコール

遂に正義の門が開き始めた。さほど時間もかからず軍艦が迫ってくるだろう。一旦下に向かい、フランキー一家と合流する。

「ぐ、ぐ、軍艦十隻がせめてくるウウウ!!」

「それに海軍中将五人。国家級戦力だな」

バスターコールの説明をすると、絶望した顔になる。

当然か、そんな大戦力相手に戦える体力なんてほとんど残っていないだろう。

「キングブルはまだ動けるか？」

「ハ、ハイ!!なぜか迫撃砲の砲撃がほぼありませんでしたので!!」

「それならお前らそいつで全員先に脱出しろ。ここにいると巻き込まれるぞ」

「で、ですがアニキと麦わらさん達が……」

「大丈夫だ、護送船なり船奪えばいい。もしもの時は俺がなんとかする」

いまいち納得はし辛いようだったが、正義の門が大きく開き始めた。

「……わかりました。アニキ達をお願いします!!」

「ソラよ、これから何が起こるのだ?」

尋ねてきたエネルギーに、掻い摘んで説明する。

「ほう……中將とは……なかなか手応えのありそうな相手だ」

おつかしいな……若干戦闘狂になりつつある。
とりあえず屋上に上がり、現状を確認する。

もはや正義の門が完全に開くのも時間の問題だ。

「遠いが確かに感じるな……強い気配だ」

まだ軍艦は視界範囲には捉えられないが、エネルギーは感じたらしい。
だがそれより先に、手前の橋に人影が見えた。

「出たぞ…… “ためらいの橋” の上に……見ろニコ・ロビン!!」

「もはや正義の門は開いて、俺が通るのを待っている」

「あれをくぐれば俺は……世界の英雄になれるんだア!!」

「おめーじゃ色々足りてねえよ、つと!!」

油断しまくっているスパンダの後ろから近づき、全力で股間を蹴り上げる。

「ハウツ!!!!!!」

白目を剥いて気絶した。正直この下衆ヤロウにはこれ位じゃ足りないけどな。

「あなたは……?」

「つと、初めましてだな。ニコ・ロビン。とりあえず敵じゃないから」

「久しいな、青海の考古学者よ」

隣から声をかけたエネルギーを見て明らかに警戒する。

「神・エネルギー!? 何故ここに!?!」

「安心しろ……今貴様に用は無い」

「そういうこと。信じられないと思うけど……」

そう言いかけた所で、

「……かア!!」

階段から変態……もといフランキーが現れた。

「オウ!! 誰だおめえら!!」

うん、やつぱりどう見ても変態だな。海パンアロハのおっさんだもんよ。とりあえず、フランキーにも事情を説明しようとしたら

ドガアアアン!!

「何だア!!島の防護柵が!!」

どうやらそんな暇もないらしい。軍艦からの砲撃が始まった。出来れば接近される前に叩きたい。

「フランキー!!彼女を頼む!!」

「アアアン!!てめえらどうすんだ!!逃げる気か!!」

「んにや、軍艦叩いてくる!!」

どれだけ馬鹿な事言ってるんだって感じで、2人とも驚いた。むしろ、この為にここまで来たようなもんだしな。

「行くぞ。エネル」

「ああ。いつでも問題ない」

そういつて、完全に開いた正義の門へ飛んでいく。
さあ、本番だ。全力全開でいこうか!!

く エネル side く

成程……確かにこの数の軍艦があれば、島一つなど軽く攻め落とせるだろう……

「中将!! 何者かが本艦に接近してきます!!」

「なに? 敵か?」

「わかりませんが……空中を飛んできます!!」

だが……一人で国すら落とせるこの私を止められるか!!

「5億^{ボルト}V・打ち砕く^{トールハンマー}雷光!!」

ズドオオオン!!

横から打ち抜くように、雷撃を放つ。ふむ、軍艦とはいえ装甲はこの程度か……
これだけで貫通するなら、敵を減らす事など容易いものだ……

そのまま続けて二隻、三隻、四隻と軍艦に横穴を空けていく。

少し離れた所では、ソラが同じように穴を空けていた。

流星というべきか……一発で二隻ほど巻き込んで撃っている。

さて、そろそろか……そう予想した所で強い気配が四つほど向かってくる。
近くの甲板に上がり迎え撃つことにする。

「貴様……何者だ？」

「麦わらの一味のようだが……容易く軍艦を沈める力……脅威だな」

「自然系ロギアのようだが……迂闊だな、こんな場所で戦うなど」

「……………」

おそらく、この四人が中将なのだろう。心綱で感じられる気配が今までで最も強い。ふん、まさか四対一とはな……面白くないか!!

「我が名はエネルギー!! 青海の強者よ……その力、見せて貰おう!!」

バチン!!!!

かつての2億Vポルト“雷神”アマルとは違い、身体を巨大にはしない。最大Vのエネルギーを全てそのままの身体に留める。

青白く輝く肉体は、“雷速”を遥かに超えた超高速機動を可能とする。最早その速度、光速に届きうるかもしれない目にも映らぬ速さ。

「MAX10億V・武御雷」
ホルト
タケミカヅチ

これが今の私の全力だ……存分に戦おうではないか!!

〈side out〉

「おめエさん……ちよいとやりすぎじゃあないの……？」

軍艦にレールガンで横穴を空けていると、圧倒的な気配を感じた。遂に来たな……初めての命懸けの戦い、身体が震えてきたよ。

「海軍本部大将 青キジ」……」

「俺の名前くらいは知ってるか……？ おめエの名前は？」

「俺の名はソラ……海賊だ」

「そうか。なら……手加減できねエぞ」

「……上等だ!!」

次の瞬間、海が凍っていく。

負けるわけにはいかねえな。

この世界を生きていく為に、越えなきやいけない壁は超えるだけだ!!

第10話 海軍本部“大将”青キジ

「アイス・エイジ
氷河時代」

瞬間辺り一面の海が凍結する。足場が出来たのはいいが、触れて凍らされたらたまったもんじゃないな。

空中に留まり様子を窺うと、一息つく間もなく追撃してきた。

「アイス塊ブロック・バルチザン・両棘矛!!」

氷の槍が何発も迫る。だが、これなら対処はしやすい。

「魔法の筒……」

発射された青キジの攻撃を全て空中でかき消す。

「返すぜ!!」

空間を操作し、氷の槍をそっくりそのまま返す。それを目の当たりにした青キジは驚いていた。

「はあ!!なんだそりゃあ!!」

反射された攻撃に驚愕しつつも、あっさりと回避する。

最後の一発に関しては防がれ、触れた瞬間粉々になって散った。

……やっぱり氷攻撃は効かないようだ。氷結人間は伊達じゃないってか。

「おめエさん……なんの能力だ?六式を使えるわけでもなさそうだが……」

空中に留まる能力と反射する能力が繋がらないようだ。

片方ずつなら有り得るのだろうか?

「自然系」ソラソラ」

「……まさか正直に答えるとは」

「別に構わんさ。寧ろ聞いたことあるのか？」

「いんや、初めてだ……」

やはり今まで存在したことのない悪魔の実みたいだ。

「空」ねエ……聞くだけでも厄介そうな能力だが……」

一旦攻撃が止み、話しかけてくる。

「目的はなんだ？」麦わらの一味」じゃあなさそうだが……」

仮にどんな目的があったとしても、バスターコールに正面から喧嘩売るなんてな」

「別に目的なんてねえよ」

「目的も無しに、海賊の味方をして世界の敵となった奴らにつくのか」

「彼らはただの知り合いレベルだよ。今こんな状況なのは成り行きだ」

「俺はただ、自由でありたいのさ。その為なら……世界が敵でも構わない。

あんな人を人とも思わない奴らに、従うつもりもない」

あんな世界貴族カに逆らえない軍なんぞお断りだつての。

心当たりがあるのか、若干苦々しい表情を浮かべている。

「海賊も似たような奴らは……いや、むしろ海賊の方が多いかもしれない」

「別に海賊が海賊を裁くのに問題はないだろう？海軍が世界貴族を裁けるのか？」

「本気……のようだな」

「さつきも言っただろ。誰よりも強く、誰よりも自由に。こんな時代だ、海賊の方が俺の目的に近いだけだ」

「ナルホドね……だがそれは、この世界で最も困難な目的だ」

青キジの全身から冷気が迸る。さて、こっからが本番だな。

「その自由を貫きたきやあ、俺を倒さねエと無理な話だ……」

わかってんよ、そのくらい。

「わりイが……おめエさん程の脅威を野放しにするわけにはいかねエ……」

「……………」

「今ここで、死んで貰うぞ」

なんつー覇気……これが海軍最高戦力の力か。

「お断りだよ、コノヤロー」

くろびんsideく

私は今、夢でも見ているの……？

眼前に繰り広げられる光景はとても信じられないものだった。

20年前私から全てを奪い、人生を狂わせたたった一度の攻撃が

“バスターコール”が……たった二人の人間に抑えられている。

「……オイ………」

どうして、あんな強大な戦力に正面から戦えるの……

島一つ、そこにある命を奪い尽す暴力に対して、なぜ向き合えるの……

「オイ!!ニコ・ロビン!!」

「……え？」

肩を捕まされると、誰だったかしら……確かフランキー？

「今鍵が飛んできたから取り敢えず外した!!んでアイツら誰なんだ!!」

気づけばいつの間にか海楼石の手錠が外されていた。

「私も知らない……あなたの知り合いじゃなくて？」

「あんな化けモンみたいな知り合いいねエよ!!片っぽは知ってる風だったろ!!」

「ええ……片方は……でも」

一人は神・エネルギー。忘れもしない、雷を操る空島の神。でも、もう一人は……

「まあアイツらの正体なんざ後でいい。今やるべきは……」

「あの船を奪う……でしょ？」

正義の門に向かうハズだった護送船が見える。あれを使えば……

「わかってるじゃねエか。おめエ戦力に数えていいのか？」

「勿論。存分にやらせて貰うわ」

あの2人の事は後で考えよう。今やるべきことは……

私を仲間と呼んでくれた彼等の為にも……私は生きる!!

〈 s i d e o u t 〉

〈青キジ side〉

「こんなモンかい……お前の力は……」

「ハア、ハア、ハア、きつついな……」

「もう……いいだろ。諦めろ、お前じゃ俺には勝てんよ」

しかし、予想以上に強力な能力だな……

まさか、俺の攻撃がここまで当たらないなんてよ。

空間を歪めているようだが……瞬間移動までできるたあ、

鍛えれば黄猿のじいさんにも追いつけそうだ。

だが、たった2人でバスターコールに喧嘩売るとは。度胸は認めるが、実力がなきやただの無謀だ。

コイツはここで見逃すと、とてつもない不穩分子になりうる。あつちで暴れている奴も、キツチリ仕留めておくべきか。

少々本気をだして、一気に接近する。しつかり身体を覇気で捉え逃がさない。驚いた顔をしているがもう手遅れだ。

「アイスタイム」

少しは骨があると思っただがこの程度………？

「……………」

おかしい……………どうして凍らない？それどころか……………何故コイツは俺を掴める？

「……………紅蓮陣……………」

ゴウツ！！

暑っ、いや熱っ！！なんじゃこりや！！コイツの身体から異常な熱気が……………

「流石にこんだけの超高温なら……………氷はできねーよな」

「こりやあ……………まいったね……………」

「まったく、ヒエヒエの能力が」全く使えない」なんてな……
だが、これだけ接近したらお互いに攻撃なんて出来ないハズ……

そう思っていたのだが、胸元に何かを押し当てられた。

「^リ排^ジ撃^エ」_{クト}

次の瞬間、有り得ない衝撃が全身を襲った。

第11話 一段落

〈エネル side〉

ふむ、流石に中将ともなると中々に手強い。だが……

「10億^{ホルト}V……^{ヴァンジユラ}雷帝!!」

一点集中の雷を放ち、武器ごと相手を貫く。

如何程の戦闘力を有しているようとも、雷光にはついてこれんか……

「だが、いい腕試しにはなったものだ……」

一旦武御雷を解除し、心綱に意識を傾ける。

さて、どうするか……まだ動いている軍艦は二つ。

あちらに向かうか……それともソラの加勢に向かうか……

そう思っていた所、心綱に放送のような音が聴こえた。

『CP9ロブ・ルッチ氏が……たった今海賊“麦わらのルフィ”に敗れました!!』

ヤハハハ……当然だな。我を下した男が、このような場所で負ける筈もない。

ならばあちらは問題ない、ソラの元に向かうとしよう。

近付くにつれ、空間そのものが歪んでいるように感じた。

あの男はどんな戦い方をしているのか、やはり興味深いものだ……

〈side out〉

あ、危なかった……あの野郎^リ排撃^{ジェット}ぶつ放す瞬間、逃げようとしやがった。しつかり掴んでたからいいものの、ちよつとでも緩めてたら……

しつかし、見事にすつ飛んでつたな。やっぱこの威力おかしいだろ。

俺はロギアだから反動上手く殺せるけど、生身で打つもんじやねえぞこんなの……

自身の周囲一帯を超高温にする奥の手、紅蓮陣を解除する。

予想通りこの能力は、的確に扱えればあらゆるロギアに対して優位に立てる。

あとは攻撃力を上げていかないと。排撃は連射が出来ないからな。

「なんだ、もう終わったのか？」

ツッ! ビックリした。いきなり現れんなよエネルギー……

「いや……多分まだだ……」

あれ一発で倒れるほど、甘くはないだろう……
かなりダメージは入ってるとは思いたいかな。

「それよかエネルギー、氷の上には立つなよ」

空中に足場を出し、乗るように促す。氷伝いになにされるかわからんからな。

「こつちに來たつてことは、あつちは終わったのか？」

「ああ。中将とやらは倒してきた。それに島の方でも麦わらが勝つたようだな」

空中に立ちながら、何事もなかったように話すエネルギー。

中将相手にこの余裕……。どんだけ強くなつてんだか。

しかし、向こうも終わったか……。そろそろ引き時かな？

「さて、次はどうするのだ？」

「ああ、そろそろ頃合いだし逃げてもいいんだが……」

その為には、もう一回あいつの猛攻を凌がなきゃいけない。

出来れば戦闘不能まで追い込みたいけど……

「とりあえず、少しずつ下がりがりながら様子を見る。心綱で索敵はしといてくれ」

「よかろう。出来れば大将とやらの力も見てみたいものだ」

いや、周り一面の凍った海見たらどんだけの奴かはわかんだろ……

これほつといたらどんな相手でも喧嘩売りそうだな……

く青キジ side く

あく、ちよつと油断したかな。

まさか零距离であれだけの威力が出せるたあね……

「ゴホツ……こんだけのダメージ受けたのはいつ以来かね……」

「た、大将殿!! ご無事ですか!!」

どうやらまだ沈んでいなかった軍艦まで吹っ飛ばされたみたいね……
とりあえず、周囲を凍らせ沈下を止める。

「い、いらしていたとは!!」

「す、すぐに追いかけますので!!」

「とてもこのままでは終われない!!」

なにやら騒がしいじゃないの……どうしたのかと思えば。

「CP9が敗れた……?」

信じられん……確かにそこそこの腕だったとはいえ、まさかCP9が敗れるとは……

「軍艦をまわせ!!あの船を追いかけるぞ!!」

「イヤ……もういい」

「!!」

「この艦隊を見れば……むしろ深追いする方が危険だ」

この有り様があの2人の仕業だとしても、麦わら一味に合流している可能性は高い。

麦わらの一味がCP9と渡り合える力を持つというのなら……

「そこがお前の宿り木となるか……」

「ハア……なんででしょう？」

「なんでもないよ……この一件は、我々の敗北だ」

さてと、後始末が大変だぞこりゃあ……

side out

「どうやら追撃はなさそうだな……つまらん」

少しづつ引きながら警戒しても何も起こらない。

全く第二波が来ないからって、どこか不満気だなおい。

「まあ充分じゃね？これで名も広がるし、強い奴も寄ってくんだら」

世界政府にダイレクトで喧嘩売ったようなもんだし。

その上バスターコールに正面からぶつかってのも大きい。

「ふん、まあいい……それで、どうやって帰るのだ？」

「え？」

そういや、海列車は流石に乗れないだろうし、船もねえ。

キングブルはとづくに帰っただろうし、ロケットマンは下手すつと裁判所内。

「……………」

エネルギーをみればもの凄い呆れた顔してやがる。

「まあ、線路沿いに進めば帰れんだろ!!」

「ハア……………全く」

「……………スンマセン」

そんな深々とため息つかなくてもいいじゃんよ…………

線路上に空中回廊を敷き、滑りながら帰ることにする。

さて、帰ったらなにかしますかね…………

第12話 彼の理由、彼女の理由

「あゝ、やっとついた……」

結構掛かったな……ぶっ続けて滑ってきたけど大分時間食ったな……
裏町の辺りに到着し、大きく伸びをする。

「ソラ、今後の予定は決まっているのか？」

「いや、特には。何日かはこの島でゆっくりするつもりだけど」

「そうか。私は一足早くマクシムに戻るぞ」

流石に疲れたのでな、といいながら先に行くエネルギー。

俺も今日はゆっくり休もうかな、と思っただら誰かがこっちに近づいてくる。

「くそ、思ったよりヒデエな……俺達が出張らんと厳しそうだ……」
ありやパウリーさんか？ どうやら裏町の被害状況を見に来たようだ。
だが、こちらに気づいたようで驚いた顔をしている。

「！！！！てめエ生きてやがったのか！！」

「あ、パウリーさん。お疲れ様です」

なにやらご立腹のようで、怒りながらこっちに向かってくる。
はて、なんか怒らせるようなことしたっけ？

「無事なら生存報告ぐらいしやがれ!!他の奴らも心配してたんだぞ!!」
「そういわれても……今帰ってきたとこだし……」

「はあ!!」

船も列車もないから歩いて、いや滑って帰ってきたことを説明する。

「全く……フランキー一家が喚いてたんだぞ。『ソラさんがいねエ!!』 ってよ」

「なんだそりや……わかった、早めに説明しに行くよ」

「ああ、本社にも顔出しとけ、アイスバーグさんも気にしてたからな」

「了解、んじや行ってくる」

「はあ、俺も早く休みたいし、さっさと済ませるか……」

「シマー、無事だったか……船にも姿が見えなかったもんで気になってたところだ」

アイスバーグさんは、もう普通に動いて仕事に精を出していた。案外この人もタフだよな……まあ大工だし体力はあるんだろう。

「お陰様で……ちよつと帰りが大変だったけど」

「フランキー一家も知らねエって言うし……どうやって帰ってきたんだ？」

アイスバーグさんも知ってる例のアレ、って言ったら驚いていた。

まあかなり長距離バージョンだけど。

ああ、フランキー一家のとこ行ったら熱烈な歓迎を受けた。

正直暑苦しい……早く休みたかったので早々にお暇しようとしたら、

「オウ!!ウチの子分共が随分世話になったみてえだな!!」

海。パンの変態に絡まれた。勘弁してくれ……

ようやくマクシムに戻ってきた時には日が暮れだしていた。

とりあえず、色々考えるのは明日にしよう……そう思つて眠りに就いた。

目覚めたらもう日が昇りきつていた。自分が思つてる以上に疲れてたんだな。

「ちよつと町まで出て来る」

そう言つて船から離れる。返事はなかったが多分聞こえてんだらう。軽く飯でも食うか、と思ひ町を探索していると

「あ」

トナカイ……もといチョッパ―とロビンに出会つた。
フランキー一家の治療帰りかな？

「貴方……!!」

「や、その説はどーも」

「お、お前生きてたのか!! 何処にもいないから心配したんだぞ!!」

チヨツパーが涙声で問いかけてくる。うん、めつちやええ子や……
ほとんど関わりがなかったのにこんな心配してくれるとは……

「ごめんごめん、今から会いに行くつもりだったのよ」

抱きかかえながらなんとかなだめる。うん、モフモフだ。

「フランキー一家に聞いても、” 麦わらさん達と一緒にじゃないんすか!! ” つて……
ロビンから軍艦に突っ込んでたって聞いたし、ううう……」

もはや半べそ状態。まいったな、昨日疲れてても会いに行くべきだったか。

「ごめんって。ほら、この通り無事だからさ、な？泣き止んでくれって」

「泣いてねエ!!俺は強いんだ!!泣いてなんか……」

よーしよし、チョッパーをあやしていると今度はロビンが話しかけてきた。

「……貴方は何者なの？」

「グスツ……ロビン？」

チョッパーが涙を拭き、彼女を見つめる。

「私は貴方を知らない……それなのに貴方はバスターコールに正面から立ち向かった。」

仲間でもない貴方が、どうして私を庇ってあそこまでしたの？」

彼女の瞳に映るのは理解出来ない物に対する恐怖心か、
もしくは未知の存在に対する好奇心か。

「あゝ……特に理由なんてねえよ。ああなったのも成り行きだしな」

青キジと戦り合う為に一番手っ取り早い方法を取っただけだ。

「俺はただ自由でありたいだけ……その為なら世界が敵でも構わない」

仲間の為に戦うルフィとはえらい違いだ。

俺はただの自己満足の為、世界に喧嘩売ったようなもんだしな。

そう告げると、2人とも驚いていた。まあ傍から見れば頭おかしい奴だよな。
抱きかかえたままのゆつくりとチョッパーを降ろす。

「ま、深い理由なんてないさ。俺がそうしただけ。あんま気にしないでくれ」

そういつて探索に戻ろうと2人に背を向け歩きだす。

……はずだったのだが、何故か進まない。

不思議に思い振り返るとロビンが服の裾を掴まんでいた。

「……それでも」

「え？」

「それでも、私が貴方に助けられたことには違いないわ」

「……君を助けたのは君の仲間達だろ」

「それでも、よ。お礼くらい言わせて」

“ ありがとう ”

「……どーいたしまして」

その言葉を告げた彼女の笑顔が妙に眩しくて、

俺は逃げるようにその場を離れた。

くロビン side く

彼と別れた後、チョッパーと話しながら皆の所に戻る。

「ソラっていうんだ。凄かったな……島ごと飲み込んだじやいそうな波をこう……」

チョッパーから聞くまで名前も知らなかった彼は、
アクアラグナを真正面から受け止めるなど、かなりの規格外らしい。
実際私自身が見た時も、明らかに別格の強さだったわね。

「そうなの……」

「そうなんだ!!なんていうか……ルフィとは違うんだけど、惹かれるっていうか」

「あなたもなのね……どうしてかしら」

不思議と惹かれるなにかを持った彼について話していると、
あつという間に間借りしている家に辿り着いた。

「今帰ったぞー!!」

「ただいま」

ただいまと言える場所がある今の私は、とても幸せね……

「フランキー一家のケガ見てきた。あとロビンから目を離さなかつたぞ!!」

「よし!!」くろうチョッパー!!」

「ふふっ。もうどこにも行かないったら」

本当に心配性なんだから。そう思っていると航海士さん、いえ、ナミがとても嬉しそうに話してくる。

どうやら失ったと思われた物資が無事戻ってきたそうだ。彼女が大事にしているみかんの木、お金、荷物全てだ。

その後に変態……もといフランキーがやってきた。

なんでもメリー号に代わる船を作ってくれるらしい。

まだ眠っているがルフィが聞いたら喜ぶだろう。

ほんの少し安堵したところに海軍がやってきた。

それからは怒涛のように話が進み、驚愕する事実がいくつもでてきた。

海軍本部中將“英雄”ガープがやってきて孫であるルフィを折檻したり

肌身離さずつけている麦わら帽子が赤髪との繋がりを示すものだったり

ルフィの父親があゝの革命家“ドラゴン”であるなど驚くことの連続だった。

そして気づけば、今はバーベキューが町全体を巻き込む宴になっている。

「本当に……楽しい一味ね」

喧騒から少し離れ壁を背に彼らを見つめる。

「そのまま聞け……ニコ・ロビン」

その言葉を聞いた瞬間、背筋が凍った。

「……青キジ……!!」

「なぜいつものように逃げ出さなかった……お前一人ならどうとでもなっただろうに」

「……今までとは違うと言ったでしょう。私は彼らを見殺しになんて……」

出来る訳がなかった……こんな私を心の底から信じてくれたんだもの……

その後に関わされた話は驚いた。彼の友人サウロのこと……
今回態々青キジが出てきた理由……予想外の事態の発生……

「宿り木を見つけたお前は、これからその答えを……」

オハラとサウロがお前を生かした意味を……見せてくれるのか？」

「……そのつもり……」

「………だったらしつかり生きてみせろ……」

当然よ……私を救ってくれた彼等の為にも……

「ああ………それからもうひとつ………あの2人は何モンだ？」

「………」

2人というのは、バスターコールに正面から立ち向かったあの2人のことだろう。

「だんまりかい……」

「私にもわからないわ……」

「おめエさんを助けたわけじゃねエと……」

「ええ……」自分がそうしかつただけ……そう言っていたわ

「なるホドね……」

そういうなり圧迫感が消えた。壁の後ろに回ってみても誰もいない。

「おいしい、ロビ〜ン!!こっちこいよ〜!!」

仲間達の呼ぶ声が聞こえる。

「食ってるか〜!!肉〜!!」

彼らとなら、どんなことだって乗り越えてみせる。

「私も……やってみようかしら」

「おう!! やれやれ!!」

「や、やめてくれロビンちゃん!!」

(やはり、あの強さ……そして思想……今の世界政府にとっては危険すぎるな……)

数日後 エニエス・ロビーの事件と共に全世界に手配書が発行された

麦わらの一味とされる7人には全員懸賞金が

暴れまわったフランキーにも懸賞金がかけられた

だが それらよりも世界が驚愕したのは

“ 空人ソラ ” 懸賞金6億ベリー

“ 雷人エネル ” 懸賞金5億ベリー

初頭手配からありえない金額を叩き出したもう2人の賞金首だった

第13話 6億の男

「…………あららら」

どんぐらいの金額になるか読めなかったけど、スongoイのがきたな……。
手に入れた新聞と共に入っていた二枚の紙を見る。

「ふむ、5億か…麦わらより高いのは当然として、なぜソラとここまで差がある？」

自身に懸けられた賞金を見て、エネルギーが眩く。なんか悔しがってないか？

「やっぱ大将と直接ぶつかったのがデカいのかもな。

つってもルフィだって最初は3千万のはずだし、最初からこの金額はかなり高めだと思っぞ」

金額はたしか政府に対する危険度に応じて高くなってくはずだしな。

俺もエネルギーも単騎で軍艦を容易く落とせるのが問題なんだろう。

「やはり、もつと強くならなければ……ソラ、今日も付き合ってもらおうぞ」

なんか戻ってきてから修行に熱が入ってるな。エニエス・ロビーでなんかあったのか？

「わりイ、今日はちよつとルフイ達んどこ行ってくる」

手配書が出たならそろそろ出航する時期のはずだし。挨拶位はしておきたいしな。

「一緒に行くか？」

「そうだな……当分の間会うこともないだろう」

あらま意外。きつぱり断るかと思ったのに。ちよつとは性格もいい方向に……

「私の賞金額を見て、どんな顔をしているのか楽しみだ。ヤハハハ!!」

……前言撤回。まだ一人にさせるのは危険な気がする。

「うっは〜!!上がった〜!!」「ゴジュ」「……誰だ」

ルフィ達の所に着くとちようど手配書を見たようで、様々な反応だ。中でもサンジは余りに不憫すぎる。絵ってなんだよ。

フランキー一家はさらに一枚の手配書を取り出す。

そしてルフィ達にフランキーを海に連れ出してほしいと頼んでいた。

「あと、ソラさんは居ますか?! あの方たちはもつとやばい事に」

「呼んだか〜」

そういうながら入ると全員の視線がこちらに向く。

若干まだエネルギーにビビってるのもいるみたいだけど。

「ソラ!! おめエ無事だったんだな!! 色々ありがとう!!」

「ソラさん!! あんたら2人にえれえ金額が!! 一体あの後なにしたんすか?!」

そういや、目覚めてから初めて会うか。宴にも行かなかつたし。

ロビンとチョッパーが説明はしてくれていたようでそこまで驚かれはしないようだけど。

「なにつて……」

説明しようとしたら、俺たちの手配書を見せつけて

「ソラさんは6億!! エネルさんは5億ですよ!!」

「 「ろ、ろ、6億と5億ウウウ?!?!?!」 「 「

「い、いったいなにしたらそんなことになるんだ?!」

「すっげーなソラ!! でもエネルにも負けてんのは腹立つな!!」

「神も5億か……まアあの強さを考えれば妥当か……」

「いいな……俺なんて頑張ったのに50って……」

チョッパーが凹んでいる。もっと凹んでるコックさんもいるけど。

「誰だよコレ……なんで俺だけ……」

「ヤハハハ……麦わら、お前は3億だったか」

「くっそ、すぐ追いついてやるかな!!」

睨みあう2人。まあここで大乱闘する訳じやなさそうだしほつとくか。

「それよカルフィ、そろそろ行くんだろ?」

「ああ!! 船も出来たみたいだし、そうだ!! ソラも一緒に行かねえか!!」

そういつた途端、エネルギーとゾロがもの凄い嫌そうな顔になった。

「ありがたい申し出だけど、やめとくよ。一応船もあるしな」

それに、と言葉を続ける。

「俺が仲間になると、もれなくそいつもついてくるぞ」

「いや、ソラの仲間なら大丈夫だろ。もう悪さしねえよな？」

「おい、ルファイ!!」

「ちよつと、ルファイ!!」

ゾロとナミさんが窘める様に叫ぶ。まあついこないだまで敵だったし当然だろう。

「むしろ私は嫌だぞ。この男の下につくなど」

「え? だってソラと一緒にいるじゃねエか? それはいいのか?」

「ソラと私は対等だからな。貴様がソラに勝てたら考えてやってもいいぞ」

「よし!! ソラ、勝負しろ!! んで、俺が勝ったら仲間になれ!!」

「やめておけ。貴様では勝てんよ」

おかしい、流れ弾がこつちに来た。つーかエネルギー、俺を理由にすんな。

「はいはい、また今度ね。いくら治ったとはいえ、まだ全快じゃないだろ？」

「え〜!!」

ブーブー言いながら文句垂れてる。子供か。

これ以上引き止められると強制的にバトルになりそうだ。

「まあまた直ぐ会えるよ」

どうせ次の魚人島で進路は集まるんだしな。

ルフィの前に拳を突き出す。よくわからない様子で首を傾げている。

「一緒には行けないけど……ダチには変わりないだろ？」

「もちろんだ!!もつと強くなって、絶対仲間になつてもらおうかな!!」

「楽しみにしとくよ。そんじゃ、またな」

拳を合わせて、再開を約束する。さて、俺達もそろそろ進むか……

なんか後ろから視線を感じるが気のせい気のせい……多分。

「エネルギー、そろそろ次の島進もうと思うんだが」

「構わんぞ。ある程度なら放置したまま飛行を維持できるようになったからな」

「そうなのか?ちなみにどのくらい?」

「一週間は平気だ。これで細々と私が補給しなくても問題ない」

……もう何も言うまい。エネルギーの強化に引っ張られて、
攻撃機能取っ払った筈のマクシムまでもパワーアップしていく……

「これで舟を気にせず修行が出来るというものだ……フフフフ……」

「なんていうか……6億の賞金首には見えないわね……」

「そりやあナミさん、ウチの船長も3億の首には見えないでしょう」

「それもそうね……」

「くつそく、もつと強くなって絶対仲間にしてやる!!」

「おイルフィ、あいつ等より船大工を優先しろよ!!」

「大丈夫だ!! フランキー仲間になるって決まってるからな!!」

「……なんでもう確定してんだ……」

「よし、船とフランキー貰って出港すんぞ!!」

「……ウソツプ、来なかったな……」

「大丈夫よチョッパ、長鼻君はきつと来るわ」

「ロビン……でも……ん？なんか怒ってないか？」

「どうして？別に怒ってないわ？」

「……（なんか触れない方がいいかもしれない）」

「（そんなに私といるのが嫌なのかしら……）行きましょう。皆待ってるわ」

第14話 月下の出航

「そうか……そろそろ行くのか」

今日出航すると決めた俺は、アイスバーグさんの所に挨拶に来ていた。

「ああ、ルフィ達も行ったし今度は俺達の番だ」

「寂しくなるが……まあいいさ。見送り位はさせてもらおうぞ」

「別にいいって。今生の別れでもないんだし」

「そう言うな。あの船が実際飛んでいる所も見てみたいしな」

……なんかそっちが本音っぽいな。

やっぱり船大工としては実動してるところが見たいのかね。

「別にいいけどさ。一応今夜に出航する予定だから」

「は？なんで夜なんだ？」

「なんとなくだが、あの船は夜の方が似合うから」

そういうと、訳が分からないといった顔になった。

「行くのか？」

「ああ。今夜出航だ」

「む？今すぐではないのか？」

ありや、エネルギーならわかつてくれると思っただが。

「やっぱりこの船を出航させるなら、月下の方がいいだろう？」

元々そこに行く為に造られたせいとか、俺のイメージでマクシムと月はセットなのだ。
変なこだわりを笑われるかと思っただが、何の反応もない。

「……………」

ノーリアクションはやめてくれ……恥ずかしい。

「あゝ、なんなら今すぐでも行く」

「ヤハハハハ!! そうだな!! 我がマクシムには夜が似合う!!」

わお、いきなり上機嫌になった。

「こんな真昼に飛び立つなど勿体ない!!あの限りない大地が浮かぶ夜こそ!!
マクシムは輝くのだ!!ヤハハハハハ!!」

やべえ、上機嫌通り越してハイになってる……

「えっと、じゃあ俺は買い出しに行ってくるから……」

今のあいつに関わるのは危険だ。そう感じ取りこつそり逃げようとするが、

「まあ待てソラ」

がっしりと肩を捕まれた。おい、掴むなどは言わんが覇気を込めて掴むな。
イテエんだよ、なんか日に日に強くなってる気がするし。

「今の私は大変に気分がいい。付き合え」

「いや、結構です」

思わず敬語になってしまった。嫌な予感がプンプンする。

「そう言うな。試したい技もあるのだ。」

「いや、ホント、買い物しないと色々足りないから」

「……ふむ」

「んじゃそういうことで」

「仕方あるまい。さつさと済ませてくるがいい」

ふう、なんとか抜け出せた。倉庫から出る瞬間、チラリと後ろを振り返ると。

「……………ハ？」

黒い龍を従える、エネルギーの姿が見えた。

「……………よし、見なかった事にしよう」

俺は何も見なかったことにして、町に繰り出していった。

背後から『ヤハハハ!!』と高笑いが聞こえてくるがキニシナイキニシナイ。

気持ち時間をかけて戻ってくるとエネルギーがぶつ倒れていた。

どうやら調子に乗ってアレを出し続けていたらしい。

「ふむ、まだ使いこなせんか。だが、これならば……………」

「お〜い、大丈夫か〜」

「問題ない。今はほとんど雷も出せんが直に治るだろう」

「雷も出せないって……ホント何してたんだよ」

「貴様を倒すとおきだ、教える筈なからう」

「あつそ……どうする？ 出航伸ばすか？」

流石にエネルギーと同じレベルの電気エネルギーを生み出すのはしんどいんだが。

「構わん。夜までには回復しているだろう。」

「了解」

さて、そんな最終チェックだけしところかね。

「うーん、いい夜」

倉庫の扉を全開にして、外の空気を目一杯吸い込む。

日が沈み、夜の闇が辺りを埋め尽くした。満天の星空に美しい三日月。

「見に来るとは言ってたけど……」

アイスバーグさんに、フランキー一家。パウリーさんたち職長方まで。

「来すぎじゃね？」

「ニューアニキが『おもしろいモンが見れる』っていうもんで!!」

「それに、お世話になりっぱなしでしたから!!」

「見送りくらいさせもらいやす!!」

「だから、ニューアニキはやめろ……」

「たまげたな……お前らの船を見たことなかったが……」

マクシムを初めて見たパウリーさんが目を丸くして驚いている。

まあ、船大工からしたらありえない存在だもんな。

「おめエら、目的果たしたらこの船くれ!!いや、むしろ今分解してエ!!
中どうなつてんだ!!もつと早く見せろやこんなモン!!」

「あんたはどここのフランキーだ」

目が血走ってますよ、怖い怖い。やっぱ見せなくて正解だったかも。

「馬鹿たれ、今こんなの手に入れちゃあつまらんだろう。いつか自分達で造ればいい」

……この人達なら本気で造りそうで恐ろしいよな……

実際この島を浮かべる計画は立ててるんだろうし。

男ならドンとやれ、つて奴だな。

「それじゃあ皆さん、お世話になりました!!」

「ああ、またいつでも来い。修理なら格安で請け負ってやる」

「ソラさん達もお元気で!! フランキーのアニキに会ったらよろしく!!」

「伝えとくよ。それじゃエネルギー、いいぞ!!」

「了解だ……5億ボルトヴアーリV放電!! マクシム起動!!」

船全体に動力が行き渡り、その機能が目覚める。

次第に船体が浮き上がり、そのまま倉庫から飛び出す。

「ホ、ホ、ホントに飛んでる〜!!」

「スツゲー!! 夢見てるみてえだ!!」

「くっそ〜、いつかあんな船造ってみてエ〜!!」

「シマー、いつかな……」

「それじゃ皆さん、御達者で〜!!」

徐々に高度を上げ、ウォーターセブンから離れていく。どんどん小さくなっていき、雲の下に隠れてしまった。

「やっぱりこの船には、夜空が似合うな」

「同感だ。さてソラ、次の目的地はどこなのだ？」

「ログは一応は魚人島行ってトコだけど……その前にシャボンディ諸島だったかな」

まあ、飛んでいくなら魚人島経由じゃなくても赤い土^{レッド}の大^{ランド}陸は超えられるが。

「そこで海路が一旦集まるはずだから、強い奴もいるかもな」

「ほう……それは楽しみだ」

「ま、成り行き任せの旅だ。のんびり行こうや」

「そうだな」

……おい、なんで放電しながらこっちくんだよ。

「時間はあるのだろうか？ならば付き合ってもらおうぞ」

「勿論だ。俺もまだまだ足りないからな」

さて、大戦争までにどんだけ鍛えられるかね……あの人に会ってみるのもいいかもしれないな。